貞享式海印録

巡旅名所
神釈無常
乾坤時分
時音季雑

三

へ 5
4676
3

へ5
4676
3

昭和十六年一月日寄
尼野貴英氏贈

自享式海印録三

曲齋述

□義

本出 義句のみ六式を用す其他嫁娶治産頌等の文字を見出さざるは惜しむべきなり只南句の意を無あらば文字まゝに拘す義句を法とし一切衆生他つゝ義を句とすとあるはし悪い風雅の花実を出さゝ二句より五句まゝあるといふも先ゝ二句及て張仏の作法を定さる迄実文字を目ゝ拘す法を句とする故ゝ陰陽に句も五句も無ふる時ゝ必ず残の段あり〻情て一定の変化て拘る故ゝ多くゝ二句ゝて仕ふるなり

◆張て字一限の服ゝ法ゝ任て張時ゝ句も場色式有ゝ張てするを林句ゝ意門ゝ二句ゝ張るとか見ゝ式下ゝ意を張る法をとくを見ゝ

□三 今の他世も悪い必五句あるひとて古和乃

いつる哀の句を哀へいまの社哀の工みあること
仰ぎ仏社の仏の手活して廿子章の手は
もちてはするもやく章ちちあくむ 黙

第一の先人よ哀れやとも哀
思へそやとも哀れめ人の哀れあるて
哀句の作者は其哀れ哀れとも後の作者の眼
力より信いと哀の深情を又分られい彼と
哀との二句と等て哀決て二句ことよへ
主尾より一句捨と思むむ者つまいを者て一結の
哀調也又次に移るも所よあり此社
詮する所哀いんはみて句みあすとく

[illegible] 苦い憂 五十句 句句とも哀句あき時い
哀といえ寺猶おと寺かくもう大切なるおなよ
皆哀句は泥く僅二句一所は出る時い幸として初
て書中哀句稀く又多く哀句ようの志ふて
はと者く一書不出来はあれる故は哀句出対ようむ

時に二句ら五句もあるて一対ようむ時い孫て対寺
と句ようる捨ようとい了かいくも仏幸書面
もう哀句多く出ようとらくなく 姉

◆宴は二句長句句切の手し弟句ようる哀決
て二句ようい捨す又哀句ようる書ふて長初
んのさくく去来仏有は来るて和七は哀続の
法い伝さるを今も氏又は哀て哀を続ぬ人多く
・哀句仏二仏ようを者ふく 嘉栗 アラ まも氏如手
・白句ようく一句ようく七八をく 鶴 まも八を如出ようう
句句は長一句のふい 梅伏 作化 遊哀のく
・無哀の書い みなむを五句 閑集書カ行 梅十位
十句仏皆く其句カ仏ようを哀の書い影ーりまとる
仏氏に上ようい無哀の書を来又寺
熟無哀の書を関ようを有り彼万葉は
和字は君長父子安的は字明友の書人を伝え
ようく寿をようり長世の集社哀句は伝し

されい妹せのりの川あでも去人の伝通ふ中い
云係もろこあろ〻ちひあむ無意のまも氏程
あ〻或い父子の結或い君臣の契を結ぶ者を続さ
るあい彼海ひの述るくく文飾さあて云意のう
へあ〻通ふあるみいあるく人よまあ〻分彼れ
強ないで止すとえ西れ字西の仏ら来あるか
き時より夜日の掩抱を掬ま立て席ま敬へ〜さて
白出船宝り方と変りて首てみ立拾り〜〜文
ま抱て又特ま立を寄神秋意意第名仏侍巴李
月あの配未頂更も油引も寄とと〻も連京の人匡
あれい已設ぬ妻あ〻或い懲〻或い勧て文意を
矢す逐ま君国尾す乞天程ま陸ま正風の
設し如はくまて意意多意稚くの新序毎ま
変る〻必古仏を概とて已ら拙き停ま云意の設す
るあかられさとて意する者ら白あきま意ちむい
いそで止めるる方結あむ法の設も皆志うを

〈意三去　夜の服を文ま出尾そ〜　義
刃衣の服を文ま出尾そ〜　義
琴瓜をしむ袖乃橘を　叩信
髪おろす佳尾ら姫　裏て　相聚
面白の花女の秋の秋まや　義
灯ゆ風を思く　四　信
川ゆく琴を角ま結分て　聚
寄まそ女ま琴婦り　義
花尾風の東ま法く　信

徒長
初秋ま恋ちぬ男を　寿伯
他ていする信のふり袖　嵐雪
を乞ま意の仏ま打せそや　義
目の徒ま先千ふ表てやて　洒堂
也時巨生寄孔のさむりさ　リ牛
女子まりぐお公　みる　法六
頭情のん中咲一ちんり　徐ま
あらひの先口文ま恋初て　反村

原
句
、

●哀字

十あり〻古き卯いあり　只り牛
癡の亟囘ゝり　コ屋
死ぬ事を哀て哀ちれあを　伯兎
お髮いあ〻ても袖しゝ合点　草二
哀をする天寿よ哀めれ　合　涼ト
おらうのい悟れもちて柏ま抜　杜芽
三匹　世の哀あれ〻ぬもれ〻あき　ねりン　杜
ムツ　頭博も僅ま依度の紅抜
先博ゝ外　ちん文ゝ入　麦麻
弾ス　人中ひゝり待〻て〻ろ　九十

△哀字面去　古ハれき

他ほか　哀の去まきゝか陽をおまゝけ　仕事
哀の剛あるおゝ〻人れあゝ　、
古拾　お代も守する又の哀　表屋
恵所沼ふ去人ゝも拾ゝ　、
一ひゝ　ひゝ人ゝ哀をゝ〻ゝりてやゝ〻性　弱
哀衣弼の殺ま去ゝ〻れて　、

ムツ　哀稲や以つの畑を売ゝ　沸点
拳ゝ　拳ゝ哀を　ちと拳る接拶　、
大抵ゝ見を稲〻する哀　りと
ま去ゝてゝ〻ゝ哀れゝ〻ゝ哀　、
、　孫ゝ〻きゝい鳥と哀　病　ぼゝ
包　茅蜩の灰ゝ孝〻哀ゝ〻ゝ　杜乞
野百　歌字ゝ〻て人も馬〻き　水甫
関の地義も哀のたのり　反朱
武義　哀ゝ〻ゝ沼ゝ高踊孫日　薇白
歌又の謂て哀点ゝん　、

哀稲ゝ〻ゝ包去　信ゝ世哀の仮ゝ〻ゝ
ま投ゝ去て稲〻する哀　哀ゝ〻ゝ哀ゝ〻ゝ
哀ゝ〻ゝ分て哀怪れれい百ゝ〻ゝと豊合
ゝ〻ゝい哀字出ゝ〻ゝ〻て拙〻仮今吉保ゝ
ゝも文ゝ失ゝ拙て字ゝ〻ゝ〻ゝ

△非哀哀字哀ゝ〻ゝ哀ゝ戒不逼
稲庶雅の妻哀或い歌ゝ哀友ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝの

●尼

哀字い哀つの哉を略すそい略すの哀くそ三去
みんい哀生哀用の哀字い略まぬ仔〳〵

・哀とする麻ゑ角のれあそ寺　一イ
れるもの果乃小栄極う　之仲
ゑくはやそのきいそぬ化ん　丁冬
さうとい候掏ユセきと　朴人

せきゝ

〈哀を張るんは

小文　秋柱の文て床とる情ゑる　史邦
ゑ秋柱い月芝のうつひ寄き彩法祢の振う
降れて一秋の春ま神をひちりむと入て
百里丈侯舟のきめく　義
振と入て舟と流即きめくと作るる侯の哀ま
恢ゑきう作去百蒔の工安之佐侯阿二白の恵
流られも丈侯向未意侯ゑと舟字を祢る
ま只船丈の湊ゑま彼彩ゑの契と結〳〵を
只えうめ吹風ようん行帆ま弟く振と入て

扶別〳〵土佐材木の片丈　袋水
材木様の舟おそいいそて去れ去佐ようゑ乃ま
字う明乃ゑ弟む寄ま二変化の恵を祢〳〵ま乃
師い潤られも切くを力を入るる弟白ま字の
ゑ乃む中む次の佐去の材ゑむと丈持の用を侯く
何ゑゑ〳〵去佐材木とゑ〳〵四屋ゑ人ま集る男の
祢お局を格ゑの光ゑ乃ゑ和ゑまと字る
桟の恵侯る〳〵きゑ乃ゑまゑ乃ゑ佐乃の付ゑた
イて只祢ふ盗ゑ〳〵ゑ〳〵ゑて

ゑゑも侯れぬ中い生祢云　邦

とゑ〳〵ゑ丈始恵ゑ〳〵ゑ次い弟ゑ〳〵丈ゑ
三い闇恵〳〵変化〳〵侯い恨恵に丈い初恵に京化
恵ゑの畑恵八い屋恵ゑ九い初恵ゑ寸い変恵とゑ
祢ゑ一ゑ〳〵ゑ恵侯を祢て祢向ま老ゑ男女変
祢侯弱又侯恵ゑ実を分て侯白〳〵付ゑ乃
千白とゑ〳〵変化白ゑ〳〵〳〵

△歌を拾ふ仮名

凡歌を詠ずる句毎に歌法ある限り仮令分合する句毎に保き無情を表する句毎に教て意の中みる句出あれそを限る歌を止よ詠るも別も自然仮名人皆さる法を書る故に或い孫あき仮を後て詠むとも或い殊情ある句を云程よ別て表句の外云を矢くるのあり等くい已下は挙る歌の終の付句を考えよ

△花は詠む歌　〈巻〇月　七ノ有

花は歌を仕るる法あり制する古式と歌仕まさるる中あり花は仕るあり花より拾る有花を拾ふ有何しるる一度一句

寄花　○あの月も歌を詠むに歌とも情む物のいさきは　菊

花仕を

△弥猶は時めくむの情なし　ソフ

式ふ歌あれと制き故に詠ずる

三位　おれら種い草と差る　支考

ひろくと内ておを見くとも　反朱

うのきて歌笠きて歌　行基

むちら嫁をむとおろり　乙由

雑　○月を平情て歌の月　フ船

きるかえむは何乃情し　千化

故て吹ろ梅の下ふ　キ角

式ア ら差い情月宮乃　乙彩

月　むい男あて歌ひき　小枝

奈蔵も変る情乃情　相如

寄　頭情の二字ら情れむろ　茂林

拾　情ふ仁の袖を引く　菊

冊子の栞まて内ふ巻笹　文仲

上十　花宴部ら菊を かさして

花宴部　号風　媒乃声　杏皆

きるくをるる脱る巻笹　重行

歌数ふく左風に次する　呂九

義　○義の後姿のおもかき　正去
義　義は義に従ひ　ゆかりそや
義仙　○二つある眼と意を自と義　少風
義人も来る出代の出　京水
○あつまりたちの君もむの数　花り
穆と柳の口ゆかし　東陽
台　○鴻の巷治府に雲をたくり　民秋
丸　ちまそそ　又　てきす　吾仲
和良　○むらちるものを聘て個　くく　乙妙
むすこ
人に見よ角おとす庶　小去
拾　○紙問ある心の新町来て長い　イ指
口華　又イ書く　柳　山次　聖明
衡　○ちらちらイ著とすむ命て　相紫
恥める冥を去をまく　業云
白見　○あの指子サ朱て巷の張　佑徒
○次おて　三人乃意　キ角
華白まゆて意を生きめ陰おて不異ある風

之コハあるよ紙付あれい華ヨ苦りす
△行雪
只行雪に君子の雪のゆきを月まあ手代加ヨ
月ヨ行てるお我てもゆ子和ゆ又花雪の月
ト仕ろ白も紙ようてい意あり
いとをき人の又さく引きて　不知
紙白　○行雪のゆきを　雪　義
○華ある　月の　さ英　方拍
○姉妹宏の神月ヨ月を又て　あ伝
○ゆを行雪く分一白菓　知足
只華あるあの山ヨ投入む　主原
姉あゆれて袴を　信　巳百
英　○行雪ヨ拍雪紙のゆきて
○横川ヨ月のもろる中宝　不玉
△黄意　多侍者
拍アの白い古紙ヨ出ろく作く必今あり意句

を考へるのみられと成られさうさるを世の白を
又ゑ者の毎く拍子あれと男の度に稗とあり
居院拍子の発より同を浄むせ良男又と呼き
今男の伊居衿よつけ豪及い年を昭り夜日
別拍の夜合妙久ちゑよう根引別文の左引
新伯又の美又も世入さ果い別弟の男の男
房ゑやれ氏も浮世のさぶあれい文人の居あく
云のもあ寸文をも他付とんるつるそ
も京のお居ゑ休き人あるむ

難　歌く拍子ゑ宗もろろく　佳六

伝情く拍女の化粧部やあるを恨あ歌く人の
必別度の芸あれとさすくるれ乱くる容を加
れむ伝伝安も程度の底をお抜一文人と
ゑゑも又拍ゑ文人の愛する河を伝て

廓へい来度く寸列　廿信　衍を
と行ろ岩ゑ一変の表を考るゑ廓の居和され

い別廿信の人拍ゑ拍拍の妓女を別一彼ゑたの
頑女ゑ伝拍ゑ又ゑ考ゑ画家ゑ情を表して

菩薩さくゑい廿さ廿と和く　抑抑

廿ゑ考ゑの冠と合る略字ゑて彼極楽の
九五廿さ大和の仮名ゑ和きて勇猛あるを
とあ白くんを拍ゑくゑ又一変を考るゑ廿字
拍ゑを出られい岩ゑは押河を豪及の口拍ゑと
又ゑ廿は廿字采図の区合ゑれ九ゑ大杯を拍
ゑゑ孤あを戴て一度をゑゑ河を伝く

孤ゑも成図ゑも御采の恵　新角

かくい孤ゑ区白廓を出ゑて変化白年之
かるる白法を伝る時い方文を拍ゑて手白を考
法更を拍ゑて云ゑあゑ徐む人

冬

雪の粧芸の玉社写形き　カラ
衿ゑゑ孤ゑ斤袖をとく　義
化人と拍を拔ゑ吹本さむ　元五

●春恋

おなじ比女人田舎わらべ　ソラ
春雨ふり雲ぬき君の名もみて　羽
紫いそぐ〳〵春くれぬ　小枝
をせ恋二ホ生寺時に一ツ忍夏恋と定一人あり
財よおぼの夏恋を分むとうの恋あき方号
うむ仮令一ホ恋おぼ望のさとそも白毎よ
変化あく何の見賜ふるゆうあむ

根本　七ホ内　ナ一　実ふく生自腹の一笑号　コ舟
舟ふおゆ〳〵　春あきあ　ソ毛
ホ一　夏ホの沢を二ホ　キ角
ナ三　桟吉恋形の叢を拾ふ　ナ九
きめ〳〵の衣春きそ佐　舟
いろあきに住〳〵の人の路一や　毛
ナ四　おなじ〳〵あし考〳〵人あり　唐風
情〳〵ふ人美令の形あ　羽
ナ五　志の一の乱舞　百ふ　角
ほ世とうき回廿を存一め　九

やく三比也と張ふを白ホ及変化いとう

春恋

今世の春人の身い大方子中風ちあきさと命ふ
幸苦「陸を出」動苔の庇「伯又恨ふ」村のせ業い
風ふうちまや二ふの風　利木ふ拝るふ
ふることを出ふとあ一の赤乃風　義行
ナ六　衣　新ふの形も今ふそ川向　七ふ
是作しのうきふ法ふ一ふの形ふきふ毎の生伝
あふふ多ふ座て教ふの使もあ〳〵明ふ女ふ
新ふのふ座まろ拾ふかく倉む附の風あり
ナ七　恋　恋おを法恋莫作とふ一イ　深ト
恋ふきふつふを又出一ふ分ふふ
葉ふふと人の形を石連て　り下
ふろくの生ふ一ホ出あふ一　キ風
行春のふ〳〵春ふふ春の中　義
ふふ一ひきのおうきの声　仙化

〈男色

男色ホモ柄きのくにの表裏きしをしまを
さあて及侍衰保く作るべし

保　むかし地下冶部みかする許云
きぬくに男の踊の泊を云て　羽

恨　れ打て乗出る傳住麦　巳茂
冶部の新り拾ひ　る　ホ人
帽子と秋のりきの色めきて　市仲

雲　美麻の金志まつて神乃麦　泊垂
踊の声をよその　忍　森　き伶

低　小夜麦みて一林乃う町　去東
云今のちまつと新る麻乃事　、

芸良　蓋の主乙り教む墓生　呂杯
金彩り図云張る の絵和て　羽盤

他有仮　ち登忍初る　麻乃そ　伝徳
冶部拾れ改乃うり麦　伝書

〈乙食器

古拾　室生の東紫みすれ乃ア　千麦
別とやさ一乙食の殊セむ　伝徳
男ロて荒の きぬくに　羽

小麦の恨ききぬくの月　雲九
拾りの麦いまて見去セ貝　支考

白拾　乙人食を朱て文ぬりて　羽
さ向る世中の麦をあ扇　麦丁
蓋いて麦ろき麦む　可柳

東拾　乙食の麦乃恵冊るこみる　巳羽
麦のあるに日　独川　秀東

〈盗人麦　七丁有

ロ子おとろく行最の伝　社雪
盗人て速乙拾り方を伝て　羽

呑拾　初もろね実しの　神　ソラ
古ちの角きる水あれ　已百

おかく麦る盗人の書　柳脚
底より角を麦て裏を く　秀蛍

●老後家

秋の夜の長く乃天て院を　りゑ
雲人も意て忘久て袖の露　栄巻
まぬの乃ち社乱そめう　芽二

△老の意

老の意て伝原くんやるやあき熱もあて一ふ
まろくの社乃ち思る方もあくく

素芸　独鳥の夫も袖のぬくきんて　羽
ちのちくく娘ちく　倡川
人ちまを寺ちくぐ天意て神ちく　紀芝
爰ていやくおち情ちまぬ、

閑　撥童ち痴ちも有ちていろて　りゑ
百　後の母所ち手陸す　し　嵐枝

拾　臣居ちちくて恋ちて　伽　白史
来初夜もあるぬ　むの乃ねぬ好　由之

△後家意

夜やちち夫人の寄おちくて　ソラ
夫ある日て松ちろく　素英

拾　恋ていちう白　琴白
秋風て時の状を出ちくく　閑水
雲夫相て宵くくの中　青井
雲夫て云沢もあん聲結て　大脇
男交て集る　三井ち　拂所
後家と云くく忘初てき　王朗
行くあるの家ちきんて　葉小
三匹　後家の庶乃行ち名のくろ　枕坊
おあの小社て夕きくおあむ　支考
木雪所のちくの文も再し　相之
芽州　古思のやうまとあくて恐き　キ角
戒名ちくておある　意人　店蓋
雑　雪白　寄原州ち志ち原て　李夕
寄ち屋てちの物て部ねちて人ち為ち時ん
のくるる乃くとくく古云を忘ちや為ちる遍
昭の伏をえて寄原英の姿を立て
名ちめてくを引ると　ろ世所む　和意

と行くりさて一変を掬するむを好る桑落
あきい丈古人に尽を来末と発し中と云て
手向の形乃はらぬ中　南口

枕白　ひくり蝶の冬乃きらく　仙子
表る男やあ引久て来掛の腰ある悩む人
のさそ乃むを早為田の庭あるうきうき乃る
加あ手の祝と丈代人の句を作り

桑の刃を見る恒さぬ思きて　袋水
とけくり俳句の書を求めて作る桑木の
次あをちくこハ名井あの粉発て丈たつきて永
名乃夫名もぐむひと初きの乳の哀を俳て

候くくむ移変るく　弱
と行くと丈社の記おて丈女の実作おくむ

△俳悪

俳の意加乃あ古ハ俳とあく作出るむ子細
あ俳を表す件のるいんあきつきあくむ

山琴　表りやを作まて中く因るら　桁士
吉宮付の中と分を宮くく女るむの盃も拔文
てれ乃を表くして今ちるる乃乃くと俳も
表あむきあるる彼重毋の重兼ほき女と乃宮

男麻さ思彩るく好木履　吉次
麻と山中の拔あれいぬく木りの人お梅の程山され
為女中の世花と足ちるこ丈俳と云彩る男ハ梅れ
忍門除あら伊俳の法時まおるむく丈拔の拔を出て

美俳あるくさ乃そ茸拔　巴兮
と法時の時を他ら乃くるハ作るかくく

本拔　思乃と思乃ちの　鶏とや　麦士
成乃の姿ハ色と鶏もて接て口合する殉れるくむと
表ハ俳の俳表を先と拔せきをれるく丈女を
付を手つき乃と重人のお合と丈て

お行と拔けきるく無きて　壷平
次るも字を咎て衣も孔ら拔る俳する拔と

又五文字にうたへるの歌をもて
扇を匿す乃秀の留を　涼之
とうたふ扇いうある人の記念や
初恋や又うぶもたくし　コセム
四つきれて傍の　媚く　翁
松灯を隠す恥ずかしさ　享子
松をするもうの多の多り袖　ソラ
五六人天台坊と　きめきて　石乗
ぶもの又の門英も十八九　五羽
月を彼の邦姫高語も　辛衛
約束の書を取け、小性方　辰化
家宝ときのこそすりの恋　支考
一島の月二三更　付り　万子
義のあちこち味方比丘尼　呂風
宇宙の恋ときの恋　化
あれやと下まで留もあるえん　孤徒
△発句歌仙

蓬
白鳥
上
白
仏像
一きつ、

鳥羽殿の鬢きるみ美よ来て　叩陽　翁
恋を尺彼る鶴の恋の月　寒佑
恋きつ鶴金山の奥保一　翁
古方の夜を白ふ風葉　翁
笑く教生ちくおうさよ　戎人
尺よるべきちのきぬく　口函
月影は星とやらを透入て　翁
忙り又すりも恋の一点乗　汉村
指まれろと俗つれみき　許六
尺よるの古い乙そる伏数　木孝
△うまのり歩
仏乃月夜素材の山振巳　翁
傳の内文おあ乃春　作来
たゝむ恋のめ斗の袖梅　杉風
思のけ了い吊を登集　翁
菜刀の先よ恨いを守ま　風
夜素あやちや和姫乃春　翁

△下女哀

氏百の法を授ける仏世の表あれとも最勇ゝすえつき下品の哀情いん云く俳句く哀を作し
苦和法の老こ哀楽老の極こも俳の悪を
大々病の効よりそあめあれさるを世界の句を
老て伝情をもしい作者のんあきまゝむち
八夕　陸奥三名古屋の哀乃残ねて　之川
コハ手の程三そ一三余り年ゝ月を打ちて
花ゝ因ゝ似る孫も定すあ人ゝ人
三別ゝ一き女一又ちてあゝ人の情を作り

松の葉ゝ暮ゝ春もする哀　才人

コハ蕪村やの拾ゝ下の情を孫ゝ哀俳ゝ哀
京大方二百年止ゝりさるを次の作者の
ゝ孫も玉子共情ゝ支店を一変ゝゝ

弦丸のそろりとあを見初　孝

とおるゝあゝもあゝもと仕ゝ化粧ゝ情ゝ哀の

ゝゝ下女哀の松山の俳句弦丸支店の
路ゝ松の枝ゝて神ゝ新ゝ哀乃孫ゝ
ゝあゝ月の哀望ゝ孫ゝ作ゝ月ゝ哀ゝて
原氏さ衣の伊を孫ゝ哀ゝ

歳月の小松ゝもちゝ孫ゝ　蕪
一次ゝ　ゝと思根の下女ゝ哀ゝ　似去
得ゝ句ゝ俳ゝ孫ゝ哀ゝ　蕪
次句　外の戸を人まゝ下女ゝ孫ゝ哀て　才凡
おゝて保ゝ恨ゝゝゝよ　蕪
松白　保ゝ孫ゝ妹ゝ哀ゝ人ゝ孝
保ゝ哀ゝ孫ゝ哀ゝを引て法ゝ　昌碧
よゝ孫ゝ掬ゝ哀ゝ麦の移　蕪
ゝ子ゝ孫ゝ哀ゝ哀ゝ井戸ゝ哀　価老
目ゝ孫ゝ誓ゝ法ゝ孫ゝ　許亡
又ゝ孫ゝ節ゝ孫ゝ情ゝ一　失放
保ゝ哀ゝ我ゝ法ゝ哀ゝ冬ゝ末て　去来
哀ゝ俳ゝ句ゝのゝ哀ゝ　支考

△蛇灵といふ哀

三匹　白々まいとそ蛇灵のさま　及朱
白れい皆　猥為を乞れ　女の陪する指と又立
　　打あ孔附面目を矣て　行楚
岸陪と陪を重る白い次ゑ其人と向て咲ち指
とゑる平宣法ゑきれい化人の其女をあゑるさま
あむゑ仕方いすれるお乳の人と云て
　　糸ホゥ腐れ百もに　杵　乙由
し、　蛇灵い木りをきれて杖ちて　文志
　　哀流の雪と采迷ゑ　系指
コハ差き為の雪骨と成あゑ表の花もつきゑ
ぬ枝毎〳〵の国務を哀〳〵人の脚る指く
山中　新茶古茶より君ゑ一云　由
コハ死人ゑと先お茶と指出すをきゑ　二
赤き茶よりも思ゑ其色と載る其花く
大蛇の拉山て其ゑい出入の哀ゑあゑむ仕女

えよう一おゑれいゑさやゑの付さゑと行ま
つゑ為ると侯ゑう雲する指を作り
　　新茶より絵押ゑる哀をて　涼ト
おゑ茶ゑう仕後と新茶より仕ゑ紀てして地指指
其左其人の仏根を明くさるを次ゑ陪ちう
ある化哀のきぬゑ〳〵雲さゑ一指とゑを
　　お乃候　面目もゑ　杖奴
と分くるい死ゑき枝哀ゑゑ〳〵さるを宣ゑあひて
おゑゑ人の面目ゑき姿と又ゑゑゑ只侍女のゑる
陪ゑの月の次ゑ化物ゑる侍家の入陪ゑの打
ゑ〳〵お乃の化ゑと迷て　あゑ〳〵ゑう二付おり
来ゑ　契も枝明為の声と人目ちて己ゑ欣
仏と左ゑゑ森を侍衣の白ゑゑき指を作て
　　蛇灵ゑ陪ゑと陪ゑる白ゑ袖　王白
山琴　枝文人陪ゑて後　おの吉　呂仙
　　尾おり為ゑる蛇灵もあり　仮上

氏屋さわ者ニ孫入ものの拵弱されてあるうを又
るニ戸口をそく押ゆて次のるニすんと入る
伏色青白く汚さニ効の毛ふたあ〳〵島を呑
て渓流の拵を伏ニ女女同者の姿を就して
お汚の旅さてい幽霊あ〳〵あてやれるあいの拵男
お補あ〳〵あてて来るいる庄変の形ニ抜出しる
あすする伝あ人の効史を忘れて徒ある技合する
ちむと忘やらい色町をき法すの寓居心白ニ
一字の意治を用て保文のわちるニ幽霊に初の
姿をたニ庵おりニきニ出 体をスセニつの男ニ云
字の哀を含う仮令あ方の拵し一字の姿を
ちて作る付い効果を強ても附ニ男ニ考あむ

△お後同熟同の意義を知る附い不苦

飯振又命ら意のいちまき 嵐雪

小京恵木そ効を守へる キ角

陳腐さすを等の意義悪 寄

今ナむと云しそうニ孫れて

史焼ふ出す忘おすら 角

飯振又ひく意ニ云うりスふうくき次めの女
あむニ附小孩ニ白幕メて髪も宮しき
小京めニ作ふむを効をふすニハスふる人乃
忘ふる拵次い恵木をふる用をみを焚
とスニ自と枠ニの中ニきふ考伝ニおすふの男
の逆変あ〳〵ふすてれて伝すきニする拵後の
家い全待恋ふを次ニい待作の恨とスニ伝方
ニ逆く来て次き与も帰すあふ変を変セ
るや附ふくと載ニ突やニい考ふニ伝ものを云
次ニて方眼い忘余ふとおふる拵をなすう

拾 戸 恵いる戸を附ふくて投ニ考れ 望水
書戸さんて逝てうすぬ 義
保 伏又の意を入おうきく 曲家
カ子 待ふ効の効をうニえふる伝のふ 酒屋

死うとい契ふるもあ大ヲ　涼ト
今文庶　男ちく生　卍臼
小町あれ山路のあく井あり　乙由
赤ん小神う　巴凸の井　臼
月和う孫よ哀こ元ろり　由
旅月のよう哀いこセあ　公乙
業平も旅をあさるう衣　水青
ほの上も尼十の　老乃波　ト
ちつと悟れをさせてみモこん　昨方
きるおの形よつそもおム　失放
てんぐ侍ハ品の極とあり　、
乃ままもて立ろ志れやもうき品　枝東
哀ゆて来と哀いれもおム　原あ
さまて医るけんせんの文　宮雲
うろうつくく文を志ろし　宮郷
ム幸の衿ようあく品草　支考
頭悔の文すーろる樹　自　信凡

冊名

、回

考品

ヤワ

、

タテ文

奥

、

哀　舟　つるヒ舟やりんき仕おく　笑ゑ

〈哀の志

徒志　志尚　眉掃の春うつけ　の白多　巴風

曇清と悔の祇とく　仏化

頭悔りてあふむまの蓋　キ角

表　小頭悔りてあふむまの蓋　キ角

表　改巾ろうよ仮の姫　あ　俟石

コハ白掘のく哀こてあい乃伴之言あく浸の花

ユ句あり志中　哀二三ホ出てるよ

白　我や来ぬ一枝青糸天の河　嵐雪

喜栗　力仙　ムとうの衣志表人よ苦白　角

花の宴に宿ム文の多あり　、

挙　ム教入室の白を志のとく　、

今　初哀のたものいたておりり　菜太

もぬれの袋乃君まそふ悔　独

西東おろうる　花口年

鳥　挙　楊を喜ろよ考ぬう眸

・非意

以二伝い意のこと分続くて

白 友達にて行ちこと一意の瓦　秋之

表　黒黒黄ゝ人て毒の袖　キ角

孔　黒ゝんの約束　名之

卦　上下の表れおそろしと　ちゝ

コハ　おこ一打意続後一打旅続こ

△非意白

・赤くま烟を立へる物屋早　柔ラン

白　松めつくるよ羽るひくし　胡布

・頭悔の果ゝ髪ま会入て　艾風

恨　仮らゐんやゝ猫のセちき　知之

月ま青小袖の袖セむく

・花の恨を出代まゐく

読音

茅白を意ゐまと又て幸の底と呼ゝり

杭　茅ん女中の供ま墨絵　りゐ

・矢おの八卦ま意をこれちく　七面

茅き女の髪奴連来くる矢おの占ゐむを夫男

表の子合意ま行人こと見一をもを付ゝりコハ

以おゐを人ゝ意と見人一を以作者意ゐまと又

ゆ付て一社を弱ゆ一由面白き見無こ

ちくくと矢金ま白き村ゆち　伯楓

・ぬ入きひて幸ゐの　口　和

梯十

八卦ゐを向ゐ砌さ　茅二

ゐゐのこと　て　ア乃張　り寄

茅ちのくまい二性ゐまぶ　面

・玉をこと文を人を肌の次ちし　仲志

おてゆくとそて毎の寄ゐお　有琴

上こもゐまゐ祈状さ陰　梅光

・亮名ま結ても後家のゐ石　面

ゐこ泡ゐる性こくの室　雪

梯十注十力伝ま意ゐきい四ゐる白と性号岩今一白

意をあちこ門ゐおゐまゐ　ゐゐ意ゐるを口ゐと

常ゐゐま又彼一ゐま反ま意を金ゐる陰白

ゐ引きて寄意ゐめゐ

□旅体載不極三句読

旅名伝は蕉翁の京おくの頃越家数を生とする乃の陽
りも旅はあれい年所乃の一所も強さむ人風
雅は美味なき味はあるむと翁宮乃の拙翁
人は何ぬ勿れ中の情は吸て新〜他人の旅
情は孫さい生母の意情は泳きようもやさし
るむさて吉屋い水辺美柳赤の伝は宅〜

ひさ　子アとむむの壁乃一刃田　孫於　翁
ヒサシ　吹れ死る　乃の伊考　曲水

義務　世比宮う〜美をられる　口国
又出て花むは仮乃うみ塵　翁
たひう〜旅く　見ちめう　白之

印　乃乃地義は桜うもや　飯生
入れて形の声も明　交　ソラ
寿を直の空無の舟　小枝
何の用やらまなるらもく　有考

梅十　分の世い西云ちの月と也　梅光
旅りの内い志め去ら　七百
旅人の記き也く去ら去て　水
佩も多ちれ古刀の鞘　翁
ひさ　月きて夜の内祖の司石　於
三読　あ引の紙方をひきうみ　円入
敬の門は二扶振うう　ラ
花落　如る爰い地中の地義そ　呂凡
連ものは小刃武士の仮桜　本李
逆　蕉の中とのそく旧沼　許云
地系て重宿集の灰百　千那
うき旅の出て吋百て云ア者　、
、　系の名い行志〜する　千梅
梅弘て旅を付る世の志　邦
夕鳥宿の世ちて移ろう　キ角
巣つの見を移て強力　城人
穴一はちて打ちひまる　梅　、

△旅字面去　カ十二　古六二去

冬　秋の比旅の御連哥いとなまれけるに　翁

九 さむ衣笛に庵むすびをおれ　羽笠

春　春の旅さるうらむ袴着て　カ号

九 旅衣あらまそうを枝やうりて　笠

三、旅芝居行て菜も　匡春　元柏

十 むし山流も三へは三らんし　山川

雑　旅をもまって付る方こ　キ角

六 山の井のんをきれや旅のけ　、

團子も世話になる旅　去書

十六 五月雨に納もるき旅の旅　何柱

十一 うき旅にかゝき涙の鮫鮭　西去

□名所　二去　同六之去　多俗者　㊀

夫方佐は名所国名地名を合て六七は体あり一座の内同名の名二去に出るとは折名所を京都とする故は旅泊の哀羈旅古の幽情雪月花の哀を紋せむる心さるを断り

名所の出て名所付ると云ふ人のあめらん阿女の抜気も出るらむ作者乾坤を出ずまって木林莊方像の姿を見よ

旅宿　あるは去ら住吉須广なきされ　キ角

句　紅もそ花田の扨なかりけり　汶足

旅人のるる宇治の橋立て　杜己

吉野も枯て冬は来まいり　乞翁

負　すまの宮も蕉世九去し　回入

退くさぐまとつぐも私の際　り角

誠　秋枝まき細田の弥のちまると　十丈

尼生あまさ今の　緑会　為町

かも　れ舎も折るゝ大京待京　野吴

難つる松江の江も此湖も　東ち

掻　あらの月伏見の月は唯なれ　千那

所用て不二を見る信れ食　千梅

台　又科く通れは本尊は関一ツ　千調

菊花を出て京を否る　玉乃

木枯はさむく山の岑　風雅
あらし出て白玉と見る苦を世　舎仙
夏後い麻も垂さす徒山　之仲
紀のすゝく見もをれす　一イ
松風の釜井赤坂冥う京
〈公名地名公名伊と独て二去
輕う住さき京侍の月　仙呂
フリ　メ是うの使うの約親類　太閤
有うの寸コ柚い竹ゝ多　右記
赤京　ク定村い赤をロと　ツ及　花フ
又教してうの使きく　ヤハ
巽　メ都重ま木弥袴の竜田川　、
辰　中使の名乃弭う川壮　西村
ヤ　ヤ月や巻舟をてる　おれ
辛　京　寺鳥風次い　仍やゝ　風草
清水の翁型コ月をお眺　有琴
〈国名　二去　大公名同

弼　手江の田植うゝ　加ゝむ　朱弦
つゝしを人の姫を石連て　り下
いゝ京枝屋一ゝん二元区て　支考
ウウウウ佐度のをれ　祁りシ
奚　紅おり乃枝房宮る効枝ム　角月
弼　因情巻うて　又て多て巻
寄　いまの使乃ひゝと考き　百巻
文ゝ向をうゝいヤの神　オ木
馬絨い夷の玉乃占うゝ　至五
冬　日本の孝白う情ゝ月を見て　、
大公　〈名公教ま京おを公おを教名名おを戦麗
旧彩　花の夷い古き赤の町　造　ソラ
ツメ　まを残せる玄仍の名　義
モ京さや志う浪花の貝を　小枝
京情の俳志も巻う志女　キ角
雑　けあ考月ウウ白華のたび　沾芝
京　鳴ゝ京いおりをもゝ京て　、

月花を乳の宮ゆうこまり　支考
あくちらうと申猫さうり　冊空
・横怒を尽くして生を疾出る　空芽
後出る法成寺の行幸あれども地名なるべしと苦
有名・夕月の淋しい雨あれと降ぬ　リ竹
打籠の尾の弱る考くと　朱ち
三法もあくの名のスーヶ　意作
・打籠を西へ流れん戻洋　柳士
・怪帝のきくし雪恨　昇角
古そもあん言和の情の鞍意　涼之
・花も落て市町いちり仕巳　左把
・夏大根の接い　逢筋　流幸
三雲くに木もくの鞍も高る　比徒
ふんのけりの今に青菜　杉丈
・レセ海の裏を中方へ芽れて　百朱
有　・市町のそこうに殊数を祇る　李門
面仙　降てくるまてたをふく　万州

雪
・雨のもの降くの張にあすり門
おりけるも移る　みりの　一虫
移そもそも木名の幸も移のと　一南
・佐くくの色紙に小会陸されて　麦林
妹の意を　妨う　妙　抱　舎朱
占をきくるもせん張花まち　義林
・江戸結の山の西代氣と　清風
さく花とおる咲く幸虞まそ　考
小金の尽くをうくるしう　風
・ふんと足美を作る江戸祇　松棚
入法のかるに三一京色　可昌
三るの恵図学接山をいくも　琴松
三移も三移の陸の焼ぶさ　冬松
只を走ふ一伊の山の杖　佃房

●京平

号　伊丹ぶり、李白つまらし庭の月　寸松
、●言水ぶに雲て見れば生いり　素丸
五之　乃ちもちろりを提て出る雲あ　芝之
鳥影く従ふく出掃一つけ　去水
世さ入る今乃山棒の京　り下
秋山　おふ・かちが樋行机鋲に忘れきて　投足
●君ゆ和り会稽の筆　キ角
、●耶卿の卍十九年も猫の皺　春来
十七　七をき辛ちやや嫉い五玄荷　コ杖
乃姓の御にむの京よしの山　有風
　茨らの雲に謎路のおうろし　風竹
雪白　節近怯す嘴の八百　乃九
、●唐去の花のよのとよあろろり　李夕
春来　松京　小会帯ホの名おも謎若ろきし
　△京と都　西雲　一座一て
　まみ紙に都の主弄出行て　翁
芝　おみん江京の時を占ふ　エ山

斎　去る人は都河乃行山家　露仙
　焔とも連て一度は京糸　、
流京　物条浄き都捨庭に萩の人て　不角
　霄のあふむ京の色ろんし　僕石
　△行名石　西去
　恒夷の撃声あき塚と身を佗て　翁
芝　言麗の條り畠作て　相栄
　操琴にひの風雅を忘さん　卜角
一橋　九雨の文よあぬ髭をおやりて　ソラ
　旅いはあ都離人の国乃月　翁
一桃の凡日　二華か入上る秦のむしくそ　、
おに二去の傍探乃さる所は先西去とおおく
　△雲字　西去　古八おき
　斎不撃い何の雲ろうりる　喬谷
白戸　六文だに雲の下領すまされ　、
　味きなく居残る雲の紀　咲山
春秋　八雲を出ず静すず咲れ　翁

・玉分

蓬

枝なる実を玉く分りり　本庵

うちまくらき玉のちくと　似去

一夜千両　蓬　玉沸もいでや出世

△玉と玉分

白彼

庭の田の面もくとおうて　菊

二枝泊の　つくづく　仿　嵐雪

拾

いせをくろ引し蓮　コ斎

うのあや　陰舟のあるまひ　仙化

白扇

うのくやく人とおるるの上　去来

焼めとやく玉彼は泥まり　信化

市尼　献　寄

立て後徒のまやる口茶中　吳竹

献ちゃ　ゆうてゆめを石附　史庵

山琴

ゆうさく住法をくも　鶴玉　小枝

玉用拭の　侍ゆうく　良者

△玉名は同玉名不分

武者は玉を先さ分て地名を庭分さ侍ば此之侍を

先ゆうもう又吳ある玉と名区分くる侍

多くれども茶台

冬

三度うもむ　不彼の美人　至五

乃終このて初ある姿を云る　菊

面紙るはまの田ゆ侍極て　ト玉

夏の如月を見侍るく　ヤ水

、

小畑もをくいせの神風　菊

疫疫に葉名日永も涼りを　小枝

初むいせの殿のとれ初て　菊

初様ゆやく宮川乃上　嵐雪

ソ

小

△同玉名区分

冬

盛人の記念の松の吹をくれ　菊

去をく宗祇の名を付れ　玉

美

いさり不仮や鮫持の月　菊

ちるむ拍板をうろ蓮　嵐雪

カ門の一せ月の涼りう　キ芝

さく

蒸くろて来の明くを　花フ

傍
傍輩ハ女むすりの下屋しき　洒堂
伏見の宮を入れさく　曲水
矢ちよの舟いよく高ね時　素拙
眼
木芽揉ハあれとや茶の標とも　楊吹
和応
旅程ハ幣ゆ願の　既ゟ　英素
松を来今寺かきさきの素尼　小枝
後椽
清くじのつゞく嘉防碓井　呼猿
茅屏の柏原とやうしむ條　白石
宿
越後の所を下にみかた　り由
此度ハ母の乳乃勇延山　許六
越後と見あくるハ古書あらき用ゐ見て此度
えとひとり付よハおもてよろして万化あれとも
号をりさりあくて只並むハ抜き限あるむ
□神祇　二表　古八表
神祇を宗わとするハ御国のよろ代を崇めて
謀の及ふ誘ふ役あるを今の人のさりしらよ
神宮の次ハ押ゐ化と讃り鳥居の陰ハ鳩の巣よ
隠して其を借枝鳥と紛らるに風雅となまきし人
あらむそる御神ハ天地と指奉りて誌の情を得
さしむるおあれハ並て知さいかぬ者の本情あらし
傍
郷都の御山を表を帰り室　嵐ラン
町中の鳥居を寄りきまりて　翁
誰
も月咲くの　いまひする家　才丸
祈する茶の中を押出し　、
梓
きわ只今とふりくぞあり　七吾
大木の見えても宮の小さよ　仲志
毎年の杜ハ祝る　仁被　杉風
お
おんひりと鳥居隠りての中　子サン
播て御らの衆をわりるる
行着木の末社ハ横に於まよ　、
力仕り神あり出て尺出るも尺より出て神出ぬ
もあり神祇ハ振向かき寿よ多出るあるし
百咄
氏神のもも盛りに咲　持　支考
鳥井を残て通る斎　柝　、

△神宮 面去 古八百四

桑の意も神くしたる許し 清原

上卜の名くまの 神 雲里

又巾きてとれも 陸奥の神ん 汝東

赤阪いところ名ふの神 遠里風

格名をあらむる神も不 柄 扶水

乃祖の神 の名ある 源氏

多を連て出れ手 鄭の神 芝山

雑 極日あくる神の苗 気 寺門

隆名きい 弘の神もとらへや 小枝

ヤ 夕リ 八宗

△宮 面去

宮門にすする 拾る月の名 キ角

神 ちい子む 紀一乃宮 宗幸

我に幸あれ 弁天の宮 只九

むりて四く 苦の古宮 伊良

△祭 ち去

米の出来れい 祭れのさき 羽黒山

物 りあるいまも中 俗る初手 草三

多の所の多 殿の多の多 、

角りの里 殺に牛 久乗 宇中

歳 贄 仏事の 手牛 高原

多 乃大名 赤羽

岩 出 多 多 お 多 や 薬 硫 白 松

多 ぬ 星 出 て 牛 宮 柳 コ

育 多 い 乃 の 門 あ く 多 ち 赤 飯

△神に尺 乃 多 多 多 多 多 多 多 多

出 ち る 宮 の 材 木 菊

拾尺 世 乃 国 に 乃 あ ち の 七 キ 角

多 力 雄 大 阪 ち い を ち る ふ 佐 砂

れ、 山 山 宝 ち 多 多 敬 寺 文 寺

ム 死 ち 人 の ね に あ る 寺 五 芳

巳 神 風 や 沙 敬 ち れ て 力 ん 笑 え ね 菊

・神天コル

五代帝

世の代々に伝へ来りて今に至るまで　万り
あるべき事もかなふ　崩御
△祈・神祇教不易
神祇教不易
冷雑七多事教唐　天文
占初午　玄孫　付言に仮

・あらゆる物の除かれ　除ト
あらゆる伝つく付きあらゆる　巴兮
引いうきし弓矢八幡　百和
寒

・年の暮又ある百や寒の月　秋来
言地まい降ぬ千丈の苔　矢作
故
あるべき梅のうち神の杖　石三
△神尺教不易　ちはた多仍者
神教お成を踏て言風の但要之基門え
あるべきあるべき踏をちす移豆信下の中空を
又て今も傳るべきあるべき伝の人
教す自信す神乃仏もあるべ
踏言あるべき言日乃ちをもて踏とて

因之至りの乃ち多和に又乃も有多教し
宮代て白神仏之一体あるべや言日者祖翁
以今の武を改お根あり乃ちを伝出あるべ
一理百通すべ去お教に来あひと解こも
乃ち改も活も之一体とそきそだやさえ
うりををあるべきもつ母おあに思うまるべ
とて乃の人をうあつもりる
教の教言葉世教うるべ和　義
一震　名　正教結し乃ちをかの　似去
只べく経教教教世の乃ちを　義
備乎て伝古孟ふ去の乃　嗜山
表扶　保べちる　悪乃のれ　ソラ
形代まるべ言の言葉の円　義
言べるべ　お文教も　古漢
乎まるべ時ひの言べ　付　古芳
山を乃て教べる神の　生寸　支水
教べの教べ風べる　仙例

士

ムツ

長良

拾

蓋

拾

草刈

夢

狀

拾

刀

置

雜

カイ印三

みゝ　財産まれて月のおさひ　雪芝
　　芝度の風　人死うある　支考
　　あゝ　悔る　幽霊のきぬ　唐風
一稿　まを　多子　楚　数の子　紙　方丸
九品　出来　田の平　陸持る　石の塚　風
　　彼の人　祝の　ちゝ　ちゝ　丸
　　懐の　曽　ちゝ　ぬ　世　ゝ
　　△同伴　蕉　面　去
　　杖の　鳥乃　人　ひ　も　く　羽
　　ま　桶　多　ゝ　き　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　　何　む　見　や　か　甲　の　下　乃　蔓　、
　　印　幾　ち　ち　の　耳　乃　骨　白　さ　ま　コヒム
　　拾　蕉　ま　ま　ま　ぬ　大　座　の　白　蕉　花り
　　杖　風　ま　ぐ　ゝ　義　彩　の　義　花　先
　　茅　州　手　寿　の　乃　あ　ま　ん　乃　あ　ま　ま　寿　牧　童
　　光　死　ん　て　あ　ま　ま　ち　い　死　ま　ま　鳥　水
　　喜　何　の　ま　ん　ゝ　幽　霊　い　来　る　嵐　七

あゝ　陶淵　寿　ゝ　ひ　て　竹　の　杖　寿　五
　　△蕉　帯　二　句　続　　多　仏　有
世　ま　ま　一　句　捨　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
大　方　寿　乃　ま　て　仕　ち　る　お　ま　れ　い　ま　ま　ま　ま　ま
次　句　灯　を　ゝ　幽　霊　を　世　ま　ま　キ　角
　　古　き　ち　ぐ　ゝ　髪　引　ん　羽
　　浮　世　の　寿　を　客　の　足　納　子
　　浮　ま　ゝ　寿　の　木　槿　の　ち　る　枝　ま　文　り　と
　　何　を　ま　る　も　寿　ち　ま　く　ヤ　水
　　廿　ち　ま　ち　る　羽　い　西　金　ち　衣　ま　て　羽
　　△死　お　去
　　杖　ま　門　浮　乃　ち　死　ま　ち　ち　羽
　　見　死　ま　ま　人　の　何　ま　る　へ　き　ま　方
　　死　ま　て　ま　人　の　状　の　名　を　よ　む　乙　由
　　野　死　る　多　ち　十　お　ち　ち　ち　果　ま　く　唐　庭
　　□歌数　二去　　庚　去
稲　ま　ま　ま　三　世　因　果　を　浪　て　六　乃　性　を　ち　ち　る

拾

他 高

家 亭

奈ひ 市

茶帝 侵

秋百

、

山ひと 言黄

宋友

衣祥

乙甫

伯急

塵生

急

生

、

矢木

一相

壬 手ち

寺子山

沙 資

逝 三日

山中も

尺二寸

△非釈迦釈不極

庵房 法峯 及 陳木杖 刀伊帝 陸 十徳

法衣 り 祐 坊 ニ ま ち 子 庄 刀 西 彩 青 布 袋 の

風流人 本係 先祖 伯父の 後法 香 煙 采 法 悟 陶 广

鬼地獄　古ゟの村名　住吉谷古町　珠数屋甲
珠数屋之墳　金被孝十般附言ニ作井梅甘人の影
八セミ詮　年武の今る事を叙として　嵐雪之を翁の題
日並を尺とらく　正月神祇云々とくく

台ツ
彼岸ちくと天王ち山　桃々
ちるむら風に吹てむせきさ跡　又我
イン
旋葉忽より萩葉をつむ　キ角
ちと低越て英居はあれはよし

アン
いまり来て極りし尾　ソラ
新月の極よりくる作乃面　岱水
ゐるとや僧のせくさよむ声　宗波
笠
作ら多をかへよとや秋の样　翁
宿の門ても髪はみえくり　巳雨
元
肴経の主並舟は各はたて　利さ
頂大のせき号蔵秋九標　宇陀
負
宇
凤わる一秋くして宇ゝあり　白凤
病中を新舟の尺まをさくり　角
抵

白兄
ハセカヲ
翠の下楢ま何を入りむ
左凤てる余凤は宇すするも蓮　其二
十徳
十徳に秋の膝を享さうり　枕川
棹
極了案親の杰をあふきさ　仲志
内裡は云てやう年と神の子　狩コ
衣
衣さく若子は牛との天えぬく　嵐枝
肴
楊色めしてるの強ら化ん　布杠
精進をあみさゝ熟は厅ふ　嵐雪
吉根の余仏うやする居士衣　翁
賣
社久
小博は棉の井はにつゝ立　雪
杖てうゝ在久ゝ祐上手し　林下
西り
浪
凡冬しき西行の　江
蓋あの紫毎よ坊のとり　胡中
凡きうく古の月の秋　吏全
長明
其佛
長明と浮世出さむ山の奥　雪
松凤の嵩地裏又也る　挪立
閑きよりんのそこる定の月　立志

壬

山伏に使ひ成て来て礼取る　若ソ

布袋　一りりても老をとる　探花　玄甫

巫おの布袋の顔に月さして　雪芝

先ソ　先祖のたびく跡を入て見る　りつ

名良　隠くともや西芝のやつを照らす　大圭

文路の中に古仏くりり　白凤

一茶　稲のちらちやう粟ちの秋　似去

信正谷　猿や香の衣にちる紅葉　翁

戸障く　信正に谷　去

地秋　彼や芝居彼や　翁

一ト　北コウ　小栖ぬき朶の枝の棲むを　信幸

天重　滅金の光揚る俳諧に　佐柏

一家の天目に旅人雨前ち　孫舎

イセ　紅畑から出て来る　菓二

ミユスを　くもりに珠数を旅の夜起て　東里

一通ひんのむの咲ちりて　嵐雪

来来　日永するさがやち　蓁　キ角

鳴よ孫子とくせむ話法し　雪

盃　夜の人も萩に秋に拂ける　太苑

タク　茶堂人の作むく宝秋も是や　沙般

秋寺の月まれ読まり　秋　了波

十み　昔く十夜に月秋投て雪　涼ト

山中　あちく紙て舟を見る　昨古

花香の為乃中に許坊主　琴之

弐升　二ツ巻表不嫁お祁もあり

△ちゝ坊　西去　古八れ去

目掛ける　ちくのらす　里白

ちの小僧のくらくろ多　キラム

七　山ちのさん千月秋に葉く　鳥水

三匠　八　俳社住さきちちあるく　牧童

英川　ちよみるんのたくされ衣よ　巴公

九　芳版も芳よゐるひく尼ち　柳士

寒　蕃に赤子を由すら小坊を　史邦

十　よう子よ夜さる寺への坊方　翁

芝巴

△ち青訓えう 五去
石甲 おれい 安孫ちのう 箱
寺侍 ゆう ちのいさうひ
枝 う 宿 いうふちあれや やれ
ほや 三井の末ちの 沢あう 旦菓
山 ろう 五 ろう ぬ 金 甚二
おう の 祈 う ちの 近 侍 七面
△仏井 ゑえイ 三去
花の 仏 生の 主ちの 歌 寺 キ角
角力 仲 ろう 初 る 自己仏 才九
次 やう 歌 寺 ろう も 我 力 円入
仏井 む い 白 き を 侍 ふ する 我 笑
岩根 ゆ ゑ 辛 き 地 義 を 高 抜 角
子声 呼 る 歌 寺 の い 名 、
△仏字 面去 古八寺 川 ろう 去
毎日の 侍 も 少 え て 仏 生 世 男 お
先 大 仏 ふ 行 ふ つ ゆ う 涼 ト

方 ゆう 宗村 ゑ 仏 ろう も 地 ろう 生 和 菜
会 仲 い 柳 へ 坊 る も ゆ 薄 東 吾
仏訓 石仏 ろう 生 欠 ぬ ゆ ろう ろう 口 面
仏 ゑ 崖 の 花 を 寄 る イ 拙
△侍 尼 溝 面去
尼 へ り 教 て 侍 生 の 月 正 秀
手 村 ふ 森 仏 彩 る 切 飾 侍 文 仲
ち の 山 仏 侍 侍 の ち 物 拙 水
葉 い 禁 乃 侍 正 う 谷 つ 船
ろう や 侍 の セ き ふ む 声 宗 彼
ま ゆ ゆ 侍 の ま ろ ゆ き ろ や 盛 水
尼 ち の む さ ち ゆ ち ち ち ま れ 文 芳
沖 生 ふ 尼 入 乃 も 田 川 時 楚 由
阿 薄 ち 一 面 る 空 坊 の 秋 木 等
ま ろ ぬ 内 ろ う 仏 家 薄 押 あ ふ 千 那
△釈 立 常 茂 不 廻
古今の変化張仏の門 長い人 男の 臣 ゆ る を 仏 乃

ゝい云常とゝ云ふい仏云い常住不変なる成し
其中ゝて他世ゝ世常ゝとゝ云ふい死去衰亡の
変をゝりそい人界乃拾あれい世出世界なる
釈と就て種々なき理者ゝ者ゝ云ふれと釈氏ち
世常を説く故ゝ門ゝおとゝ式りむ文仏い草木
五云系統の説をもて浅き化益すれい仏の
乃ゝとくゝて釈の説ゝおを種々く云云の中
殊ゝおゝむゝる他世い花を風月ゝ日を
送るゝゝもあゝ者云怪哲ゝ人を移さゝるゝ
もあゝかゝる法界の理を悪ゝ困する捷径の学
なるを他門ゝ入却ゝて却ゝ隠くゝる人あゝら作
京の表宜なゝ為ゝ他云ゝ墓ゝ亡ゝ記ゝ云ゝ
卒塔婆い供養ゝ吳ゝれい釈ゝ尼ゝ墓
ゝ立ゝるゝおゝゝて種ゝく水も花も米も沙も
云云も灯ゝも皆ゝ我を外めひやゝとゝむ乞
め愚も世ゝ浮ゝ多ゝ墓ゝ立めゝとゝも

赤ゝ衣の俗ゝ尼も教令ゝ紙ゝ
拾　労　め　ゝ計れていゝ墓ゝ殊ゝ松　ソ英　法風
殊　陸る日い石の井拾る天をゝめ
殊　殊ゝ墓ゝ法花ゝむ声　菊
九拾い歳て青ゝ山の塔　ソノ
、　ゝ山の松和くゝやゝふゝ嵐　岱水
尸　むゝゝもゝりゝを殊ゝ夕月　嵐分
殊一尸のゝゝゝゝゝゝる　佑蓬
白尚　行ゝ寺ゝ天乃昔法ゝ和　キ角
傷　髪ゝ和ゝ俗ゝ法ゝ陸ゝ　春尚
尸　ゝ面ゝゝ面ゝ尚ゝ草ゝ　コ去
一拾　布ゝ墓ゝ布ゝ墓ゝ草ゝ　風
仏　殊ゝ墓ゝ殊ゝ墓ゝ殊ゝ墓の果　去
殊　五ゝ墓の殊ゝ殊ゝ墓の釈迦　桂樹
墓　勝令の尼を懐の墓ゝを墓ゝて　竹陽
死　風ゝ文ゝを墓ゝ墓ゝ墓ゝ墓ゝ墓の対死　相学
墓ゝひゝ墓ゝ仰ゝ墓ゝ墓ゝ墓ゝ墓ゝ墓の俗ゝを墓ゝ墓

乾坤の位

蒼穹の去極三天象に日月星辰二曜あり陰陽
五行高卑五行五務五象の教を以て求めるに風
一体天象の綱紀なり雲雨雷電の教を
以て五務の西部に属する故に谷岸の山水に属する
稲雷電光の光は天空和合陰陽天象照晴
閣楼は乾坤の教部に入るかく云は分て各
教を許す付句の言葉を云めむれば
教て日月星に隠蔽風雨を
あれとも天空を蔽ふ故に
倚て見る人は天上に見る光を中を見る又五
て見る人は天上に生れとも光を陰守天何そ
日月を仰むや又向照時閣楼の教は三光とも
休用なるや教り人位の教は陰支体陰然
を見さるに向て教向雲に風に乗て風
陰る何そ教を厭はむ陰て日雲雨の

教風と雲に時は必動く動くは天のくるるなり
木の枝に雲沸り復逆に万像風雨を天
さるは陰陽日月の位的なる教め今ては
陰蔵さよ乾坤のは句去を定れるを微笑
して日三光人位に去は陰陽生極衣食
教の三去は教す稲雷雨光あるとは雲めと三光は
教を陰れは鬼仏の人位は天あるとく陰陽
風光天時は の各はりて教を陰めも山水物
居位の五して位あき如し天の三夜に教地乃
教るは何そ二の理あるむそ天地の制度は
おみとはいそくそは人理の逐雷雲を年の明光
の時は教むとは天人大陽の横をおめ

△句云之　三去　カユ云

東屋　あめあるはりては句は云ものあるべきに

陰とり日は　夕を　の教　格臨

教を

食作し日は　叶句りり　第香

仰　面に肥る琴のまわりび　斉香
出しきまわり舟のもとに　友に
川のあんぢの面は田を植て　高石
冠天は時雨と月を秋の色　柳に
世中の杜はるるまりタ立　間白
秋乃面とて空ぬ空　自笑
血の乃乳恨無日の去乃面　仰去
時面の松乃汁立をしし　義

一ツ

△面日川　九去

秋風の面木ろくと川の上　土芳
衰はめくる面の白鷺　雪芝

壬

△時面打去

足之れい家は目のてる村時面　蚫子

枕百

初時面去の松を伝来て　義

自面

丈ケや時面て雪は一昔　小枝

雅

面百く時面て時て案内　医者

村時面十秋の内を事りり　渓石

鄙する北の京医の高時面　、

久の芝居の高を時面て　木乃

字は自傍の乃義備時面く　木因

西ふと云て口ろ秋しれ　支考

△隆おそう去　七夕多者

冬園　表参　色こおりる夕云るの高　あ伝

表参　力も枯しし表れの秋　竹　也風

印　表参　図書庁は高の今さて　享子

表参　めく笑を云て雪宿てき　、

表参　去の高て好ふ図へ隆こりり　定玉

表参　居ふの中て天てみるそれ号　仙芝

恨　表面　入速とて面乃こそ　改芝

表面　灯火きき稲塚乃面　可夕

表面　ちくと要隆ふ衿そう　キ角

表面　表面　わくらてあの高を　高看

表面　月移る世い表面の作乃　兵弦

表面　松芝

コセム　ワユ　ヤワ

白ちゃ是然あくも未ほき　コセム　蓋生
ゐるは何人の云を矣くふ　沙蓋
茅蓑の中に一ありて丁の声　尤白
多のセとよつゝめかろたく　子人
△降あり降雪雪然不絶　一ツアリ
雪のちるよりたひ〳〵もつる　九兆
雪出て脇に余る去の約　去来
十郎うちうまもとのうれる　ヤ水
ちるは出て立笑妻を思ひし　義
只雪中よりはそ流れる　山店
神のひろとりさる雪　義
生約雪もて一弥九の面　佑亦
うき振い給と雪てうに仮名　リ未
みのうちうのちるる去　ろ尤

ハツ

降あり降風分　同
初ちるのちも稀見て降る　水

冬

ハツ

又降あり　仙化
降い少るかも西ら降ちく　朱佐
降くちる時　雪ひるの降しく
見えちり又西ちる雪　不丑
西ちるぬちの下てそ降まれ　、
雪　ちく取姿のあと思ひ　義
村西ちそき降ちる　叩陽
降ちる西て　杯乃杯千　巴多
降の去てちてさちく風の降　小枝
九降ゐ降ゐ風光の去　会力花古山降ゐ
又降ゐのくちる雪降ゐの去ちる力花ち又
降ゐの一向出ぬもあり仙ちる句ちさちるもの

△去　雪去

雪

さてちかひて雪ちゐ　義
提灯きろて去の　力片ろひ　布水
すこしく去ちろうの降ち　昌夫
提小ゐ嵐と去て去ん　、

△露　西去　九仙之百三六之

柿ノ実のとまる時　栗柿
樺弓　矢の相乃雪を折て　ソウム
仁といれて　降る白雪　子柏
たゝゝと紫伝柏の雪の雪　千川
雪の雪袴ノ子　義子　義子
雪の雪きく曹同宗の夕義　川
畑ノ雪　陪独の雪　掃庭
然ほい雪もうや菊木門　室浪
雪の方ら富沢丁の弦九歩　去水
いろハ　矢雪ゝ　雪の昊桃　甚之
山を後一　樋乃下雪　杉風
灰吹　拾るあるの夕雪　義
一色ノ　雪　杜の下雪　風
雪　木戒　ようる雪代地の雪　義
小徒ノ雪もあるとゝ　雪
雪まあ　おやお庵の雪

△雪　西去　本字カリ二モ

東五　点式ノ雪雨自性ゝ　公式ノ印
▲支部の立体性雪ノ五あり又自去共体部記
号の力仙ノ三出る　仍もあり　印西去ゝ
立る五去位のあいれ力仙ノ三い許ゝり

物　月雪の御や　花ノ付る　支考
雪の来る夜の雪ノ日のゝて　子雪
拾　ハ和の方美狭夜ノ残る雪　走
炬わ　きて雪ノ雪ノ　ゝ
雪ノ行ノ　ちゝつと　ワら茨　楚水
三　去の雪ノ去松の庵ノ上てある　考
去　日キ一体　画の具ゝ　ゝ去の山　雷雪
去　雪ノ雪て庇ノ　おゝ　百り
乃体　てる月い雪の柏木母の去　嵐雪
又乙雪ゝ　ちゝる　お　左志
院雪の乙ノ　ゝの切　紙　望之
子梅　雪ノ去の雪ノ　白乙

士

市南

去

匂

許舟　王氏白うの　許舟　王氏仙　王氏明

寄吉の絵に似て秋の宗旨　王氏仙

初吉く行竹の山さちつくさと　王氏明

吉られたるもちるえすの吉　老

町中に流さ川の吉ゆイ　明

△氷　西去

氷さあさをとさる湊船　古乃

引船寄氷を四の拍子り　乗王

△雪さ氷就不蹴

吉俵のさそ吉の山　〃　就人

又付さり北乃くの月さき　力与

男の氣りに氷ふさ口付　和豆

△風　吉さて二去　カ之比五　多代者

古武吉さも風伴も三去あれも面さも多用

多乃さ二吉伴吉り又若つさ風伴の左の

肩て風さる海の出代り由

二高老樹のこ乃為左　許云

限

宇

みの

友実

陸

知良

苔

知良

枯

亡記さりさ木氣　風村

枝もさや拾吉の風乃之　外九

角立てさる乃市さ山風　葉ゾ

風のさくもも般若心経　涼ト

さりさ守髪ろさと青焼　風久

胡瓜のあし赤之ク　虹桟

あるあく雪さ源次の押さり　貝与

陸衣の粘乃乃さる枝風　陸技

△風日洲　三去

風止て海く信の反舟　正秀

枝風に網の男やくの家　鬼苓

掏り之又起さく枝の風　岱水

去風さ吉敏字の振芸店　嵐之

多さ吉ある風さ冬に捕さ　氏臨

風さる夜に星子の吉あきて　江余

風あき吉の柳地さつく　ちり

り柳さりさ吏る枝風　千川

朱云　舟い出て西くゝ行き方の風　秋隆
月と風との切に新くゝ人　幸吉
乙長　新そゝんとゝ風の　雅為　伯楓
風の拍子に惜も一さし　仲志
水仙　あ義の力くをうゝ秋風　香西
川風きてゝ老ゝ新の雪　、
梅十　さくもひを惜まぬ風の吹て有り雪
花おの香の風ゝ雪の　玄
笠　わゝるおきれ風ひゝ　幸平
ゝ惜を吹れと風ゝ少遠　芝原
きてゝふさけい風ゝるゝ　ま汐
枯風ゝ梢の力ゝる　孫入て　京示
月ゝれて広を根まる風ゝ　、
風次知る牛のゝ乃　孫　義
秋風や吹紀されて如笑ぬ　、
△嵐　風　お去
おを席てゝ浮すゝ

あゝ　初風　初七の寒の防ゝ　ヤ水
秋の風ゝ　背浮ゝり　力弓
嵐ゝたゝむ　母の ちま位　孫扶
嵐ゝ来る　雪の 四里　ソラ
萩松　嵐の口をきのゝすゝ　朴人
朱云　嵐の つゝん山の 行ひゝ　紀宇
宿　狗飯　風の 夜 更ゆゝ　茶少
角ちてゝる 乃中ゝ山 風　、
△去風・秋風　お去
[句] 新式今集ゝ去風一度ゝ二百俤陪ゝ去の風と
今一ゝあゝ　秋風　秋風　月奇
一樹風　いゝ陪義ゝ陪ゝる秋の風　義
めゝん若ゝ広も寒の 秋風　仁幸
去風の 他ゝ後を惜ゝ　藥附
みの　ゝ陪ゝ教ゝ送る　去風　義
コハ西去ゝ門　去風ゝあゝ去の風ゝ
西去ゝゝ可ゝゝむゝ

△風ニ吹ス哉不煙

キツ　ヤハ

山のあちこちの細き葉の茂る　低水

ハ

ゑすゝ火尾いたゞく杖の風

竹扨

七　今もよそゝぎ表紙あけ　一樽

風ゝ吹ひく誘ひ者人ひまを　舟竹

みの　竿を拂る風の一吹　一棚

以水

白羽　低麦も氏日　列乃乃やき

侍ゝふゝとる月のやを　去水

小伎ゝ生て立きゝ石さめ　赤麦

白羽　もゝゝ十日ゝ白ゝ木この色　奈呂

毒侍をさゝと吹侍る　風　河鴉

△風ニ降徒哉不煙

矣　風の毒も南ニ手も上川　翁

キリ　小船の形を侍ゝ夕去　柳風

おもゝ棒い霧ニ埋れて　木端

雨水のゝゝ侍る毒の風　翁

門の花いゝぎゝいそさる　佐木

アメ　けのるニ一村る面のゝ通　玉芝

ちゝ花ワやの茂ニ侍る　白雪

ユキ　茶　ゝゝ噛みゝ氏名の味て　桃リン

ゝゝ地ゝの吹てる　蓬丁

実　人遠ゝゝる　孔　あゝれ　艾徒

低　みゝむのゝぎのえん命とする　信化

金扉をゝとゝる杖の風　呂風

樋をひる嵐の岩乃月住て　キ角

陸奥　平さゝゝ腸る筏士　毒秀

ちゝゝと奥ゝゝ移ゝ、

板木紙の傷て侍ゝ氏筏士の白を拔ゝ次の丁と

長白を垂出ゝを古写むようゝて実ニ補ニ

辰　思侍の毒を笑る以痛扨　林張

クモ　今ゝゝ人も四定一扨　支考

面白ゝ方ゝ風のゝゝめきて　相之

侘

ひんのむしのなくこゑきくとき　秋風
ひんのむしのなくこゑきくとき　秋雪
ひんのむしのなくこゑきくとき　秋宇

△俳諧初学　二去　春日　八

菅

白子の古文　我きりの法　工山　義
笠持て雨降りなるやセ男　義　百相

去

山子むし月一叶て赤土て　李
なりなり仲の宗長くて　李

你

芦株や水田の上の秋の雨　雨竜
古之州　烟る乃のきりの面　小コン

支離

雲のまれてうくとておのの　路次
多い雲井に去の西く　路次

苏

うつうつの残る夕月　杉風
栗山の五宝に来宝むむ　陰陽

岫

雨きり降る山のくまとり　小枝
ひんとまとやとはきりの　枕妖

△雲　三去　春日

古格

俳雲の消てあとなき抱帙　風
抑函の筐の雲に残る月　義

書信

雲きれの山のえ海くにうし　嵐竹
いくくと宝の井つく模雲に　周以

対

樗の花に雲のきれ〳〵　宏昌
わるくとるのこれて月の雲　許亡

コハ

失月くくるいくるくのの雲
木やりなる泉に挑る花の雲

百艸

去ばるとやる面の雲に　夕市
口のくくくと宝る雲に　蓑生

皮

月に又あてる雲の雲　、
雲くくの雲に井るそ雲よう

△雲・雲格　お去　仏庄　市

莖

俳の仮くに徒子むし　去　彦格
お雲生捕きてる　お公　イ秋

桃の日れて山や雲むむ　口拉
木弥に俳の子むし　山中　源ト

一格

小風にうまさ出る雪の雫　巴隆

只乃香の美のちるのき　清風

梅を見る笑のうの新出して　一昌

二枝之枝面芽をうの　、

林下の雪に山の雫り　祐子

恨

竹去のむと宿世に惜れて　祐之

人も乃香に系も乃香　茅

△徒卒お分句元富

命の用意の雪のあるう　伊菱

林下より落て笑を残る雪　十丈

うるきい能う能のむく夏　此枝

わるんのちの乃香も移を　巴形

夏能

小文

又とろ〳〵と神のうみる　嵩升

風中の春るうを月の月　青陽

古今に同作の分句と格の様あり古の人の作を

引て分るかとさるべき乃香く　仮令白雪の

梅を並て色の変化を宗とする所と知べし

門春の梅白う此月を入て　菊

ふるさむ多居の笑い去雪　成冬

己も春むと白をてつて　知足

御　キウ　キテ　挙　春の外ようる　茅

さや紅子春の衣の袖を入て　菊

一格の内　古恋う横点を引く新を新　任幸

新春能　徐福う強の笑葉　、

岩も〳〵やりんと春る一春　

きりの妹の声を降る　示右

きりそひやすしめめ乃春　、

△梅乃春を降紅雪梅不蝕

梅の火作乃春の水乃あれ降紅雪梅の一

作つも栗の紅うく神楽　桐葉

春乃之　独うけるみ乃春の　松　工山

春春之庭の天ちを降りて　東友

星坊の梅横川を立てあれ　旅枝

つき春をミうる格の此梅　貝春

友笑

△空ハ天人。晴ハ照哉不娃

ソラ 芽ぬて傳やむらの雲のそら 蒲九

十日揺れうつく松 杉 山雲

アミ 一味の花も咲くて花ハ天お女 年雅

ハレ りして吹て露もれ流り 随写

春山風の茶きは原 牧合

テリ 裸ハもあられぬ旅の照舒て 和琳

△空。彩 廿去 古八面去

たち寺とん志って大工の上の岩 梅石

岩に移りある白ら白 、

傳もちぬ岩からくて星の雲 如昼

一本鉢もりしぬ そら 法 廿呑

秋の白とて空らね 岩 自笑

書れも附来の岩の景らり 、

空の空しまるの地をとふ 涓川

我おのぬれる声の白の岩 その

秋もそや梢くの声るし岩 支考

リ拂　コノ人　松　白仙　於　小弓　枝

さらぬ附空の景かり 子岳

ひまます志まじれぬ居遠 佐里

一席ま一つの命 志り 粧

日のうけのあらまは枝の梢から 、

錦の新脚らう掃ちきり 隠哲

日うけの色乃居ま汲るし 一康

月うけも吹ちる川の夕風 如空

△照。晴 廿去 古八面去

照星を以新面どうへ而句ま七八もあるべし

出雨らう照始める蝶しさま 宗中

枝り重て瞭まりの てらる 蒼生

かし今まもやる てりらす 竺弓

月まそる荷花居のかき団扇 法芝

雲ま来も月秋の幽り郷のそれて 岡一

影のそれてらくとて気を星 落州

毋んとやうま降をらし てと 武郎

たくらさ子伏又竹田のきり晴て 文悚

もの　夕リ　標　古人　ヤワ　文巴　支德　星乃

梅 春 梅 七ゝ 枯 ヤウ

△闇○星○光○天　雲

闇にまぎ月見えまとや梅花　玉八

門前の闇は小僧の灯る　紅り

○あれ月よの くもる　今　文りん

面白くそ欲かるひまかまり　コ秋

宝てぬ下西の風乃照星を　伯急

春より目には面を花星を　、

○百所の光うしろま なきん 又　宗中

ば底の光をもいひわし　、

○陽上るやしかし　晴天　伯風

むかりあすれ天気と交会て　、

生や我おもして秋の天　角上

三ケ月あまりは天下一ちん　去来

声天てちり出たの芳しく　、

△天気　雨去

花をさへ送てあまよん天気　朴人

数寄の事も及ぬ天気合　祖巳

□時分同字　三去　多伝君

秋夕暮秋立明木の同字各々付る三夜の字

作ありて合ては十余も出る不

衛　静なる秋は秋月といふきそ　あ伝

陰つ下て行く法の秋嵐　如風

つり　○凡信にまさ月おそし秋鳥　升従

秋もんの犬さくてまさへ上手　支考

三日　○秋面の声も乃さのつやき　井歎

夕アの声を乃さ記てつる　参陸

書簾　○初所の人手に浮ぎまり　松隣

百所の松を手くて入かり　白川

みの　○ミ手きき清れめる白明るの　淡下

初所まさおもしく秋風む　庵秋

春　○夢信情着て鳴る豆版　扇扔

百五の豆れにゐのも手あみ　里扮

浪　夕

夕日を待す木陰の松　仍里

けしは落ちる夕立のあれ

義花 紙衣もむ夕あらしに月冴て　白之
孔雀て人さへもるる夕まくれ　兼石
夕アの性　今宵名出す　芝船
三日　寄の鳥うきくのうくれ　松江
名月に柿下の座の蓋うけて　北流
芳云をつくと吉井の門さして　友考
芳川 籠入いとまうでたくく月の雪　孜堂
白角 座の灯と雪待の路の雪うり　十枝
柿子 あくるうの雪も路も明られて　孝
夕雪を冊ふと吉井の月　子結
月おくも閑なる新こるく　考
秋白 月おくるとくく雪の座とあり　及朱
おくく月よりをそて牛れふ　ウ中
きく 二てわるわれ寺小袖衣　涼ト
柿十 雪のよの明れいなるの灯を消て　柿史
月よりも閑なる雪れぬ雪き　仲志
下てよりひるあくく寺餐　呂林

七月川 紙の声ほそ八袖ちあるさ寺　松川
息 ヨヒ あるを山まの袖及ま雪の雪　庫答
雪の雪袖い紙の　丘泉
附 ぞちと生て今雪のわと寺西　同菱
ちくの口和い雪くくえて雪　秋角
月ちる雪の袖和のちさみて　竹湾
雪 力仏 袖五 雪の袖の袖の袖ちや　翁
三股の冊　法川の　袖
雪 九 袖雪の　あとはしし
風くくる大寺の袖のちくく　湾
△吳附分銭之極
法雪附分と袖分二云ハ古式のさくく次の俳書と
附 云日の日もくくきてんせく　如風
彫 附苹禾の　出る　川口　至衣
禾 探すと題雪くく　夕すくく　翁
氏宮に口附分あれと附くくと宮ちの
俳もり氏歌記の吉月の歌く俳書　歌と
俳書一

●異時分 秋分

其儀

元タ

山ちかくて 作者

花とい末やと思ひ造りし 義

夕霞日ゝ立ち重なるまりのそる 虎岳

残る恨み捨きてさる 秋子

陣番ゆゝしく立ち千鳥の声 雪竇

壬

ヨタ

夕月の光る樣に実に等て 義

立芳

立川に立版俗の紙つけて り由

袋

元ロ

東京の新を始出てくる 反村

よそよそに秋の月きぬ山の月 木等

天目も青の新も新てあり 涼ト

よそよの宿をこちで合する 矢岩

七さゝ

方的

旅人を又送る月に明反 一イ

他

方的

新ゝ口もゝあすもの来て 桂り

あゝ秋ぞの吹て とるゝ 蓬丁

ちくゝの嶺を芸ゝ雪の月 支考

夕

手の秋の隣い建や大黒や 西青

夜をきて夫をうひても 反由

ヨ的

種俗に傍て新の月 山り

種紙とゝも八彩の新 俗俊

秋の水ざゝ絵を引上て

ゝ秋の残る夕月 杉風

湖に行彼残る新の月 仲志

有もゝ風の自由さ り雪

他十

行人の光きくあゝ秋の雪 羽勢

月をゝいあれとゝ秋色 伯楓

弟紀の残を見わを新ゝ 芝二

〈秋分 二去

古六三五 八

秋分八昔て昔文秋関秋陽き星明ゝ示ゝ

疎ナル

大徳の大佑て猪手を弱すも 弓英

作ゝかれむの書ゝ秋ゝ

恨

月の秋ゝ佑もお陽ゝ下ゝ雲 可夕

今ゝ月ゝさゝと今社の 亥 蓬徒

昔の夏殺のおゝ 独 板 糸紬

昔明て打ゝ月ゝ月秋 、

匂

△秋仲哉不頻

蟲砧の哀しい秋のふかまるにつれて百合の花も散れば
分て秋合ふ〜其外いづれも秋哀てなる〜

△其外ト月稲雲雲夕の時雨蟲哀田花聚
仮寝眠起夏灯の秋初のふかまるにつれて雨も雨あり

岸　ムシ
持ちて佇もわれてみぬ雲の月　義
とゝろと候のまさく秋風　コ仮
蓋菊の下より明生して　り牛
小さく人目を不撥蟲なる　初芝

南　砧
秋初を雲人入る雨あり
砧をもつて　口通
袷を考へる秋の法　回入

花鳥　千ちマ
月山の嵐風の雲〜む　ソラ
紙作る大秋す　り水

一樹　ヲヲシレ
月午の秋孫廊の芋刈　信風
分る〜一羊林をんなる　言水
明雲を山見る舟を揖をれて　風

雲　別本の　あきの雲
炭　綱の長を つく舟を　義
星さく見えます　九八〜　牛仮

カヤ
炭　松尾の俳て　支考
高の月夫を高の　正秀
月よいとゝく十四十六　外ち

秋夫　春
月の月の雲人長く春て　義
おゝく内て　つき見る　信水
月くれて高の　史邦
廿日　星の　嵐ヲ
月の俳　あく刈夏
稲刈を又秋　水
刀打も眠る成て陰の風　何文

本彩
月　角の秋の月て出る　支考
雨も秋あれと月の秋　武中
△秋分月　多有
月の雲の雲の陰磐　本寺
星の乱深く光る雲　仮村
白

□時節

東花 今案ずるに杜氏は三十年を以て千年の字を二句に用ひ於の七十八十をきらくすきもの

と細注は補ふに今明之 本文七十八上下有

△或説に此杜氏の仮名書注く文彦は年の字をも

千の刑而して杜ドノドは七十の字といふもと以へ今

よりて杜文彦経て字を用ひ彼ドのドは

トヒの略のしくとより是を杜文彦皆誤りて

杜氏のかなとある方正しコハトヒの約を千とい之は

あぢと年とは二句さるべき道理也

△年のうちさり三去

卜

初より隣は寺ね年暮て、翁

時石のかるき世を年経て

△年 三去

泳

ひの春 由田宗陳の寄の年 挑りこ

暮一鶴かくても年にそれゆる 洒堂

廿日月

貨なしの寺も結ぶ年の関 鶯白

為

探りえて年忌ある常の年 可推

柄ともも今年の七は十日さ 支彦

翁

めつきりと白子の浪の年付き 正秀

只年寄の子にならくなり 佐本

月にもそれの所を君かな 、

△涼同季 三去

去来

夕月の笠乾されや涼み竹 素結

揺れの身は涼みもなり 岑陸

△寒く季あり三去

小文

フ 立てかけし葉の下を仰ぎて 史邦

ア 乱るるき涼の名苦香合て 翁

、下戸は茶つけの揺れき袖 里桐

梅山

フ 枕元のとこも立ちき名妻あ 白雪

ハ 常々のくまと声そて所定し 二悶

ア 生きとも人のやもらし 及肩

泳き

フ 探乗されて立まき 呼仏 捨志

三日　△宮同季 両去
白ん木樸のきらんやゝしく　林角
ア　こつ店られにあるの秋さ　林風
九　うまんこわきを記さ　秋さく　正秀
厇　伴田爲も蔽々をきらりて　、
ありし林にするのきらりて　翁
十一　懐手古わす添のやうき　游刀
十　七中にさく阝おりる　木白
ア　慶ろうた眠らく呪すりむ　ま豼
庁　客のむらきを摘る困快ち　里臼
帋　はきの乞しさらてすも悪や　、
△附合同季他季氏二皷不嫌
今拯名月も云近られ　ソラ
十文　よう向和の浦の秋丁　宗紫
上千　秋もそや斜て斗し多し　翁
角秋　八朔の背利よ見ようむ　嵐竹
　　門徒ちの角たつらく　史邦

八朔秋　秋桜のくつく楊さらく咲き　山店
　　盆こもきとても付す思反　岩舌
楊山　みさく萩の年を過らし　枝動
ヒカン　名月に乞るん借て借き　惹舟
　　蕗すすめそ名眠名の毛　布仲
正月去　ひん土後手のむの咲くり　十丈
来花　同も正月　柊も正月　布賤
　　花香を味のあらそ友あれ　去来
季冥　翁葉くわす山苧の去　自然
　　季冥をいる倚い推てまる花を挙て
△冥月並者捌も丸去
繞児　正月和の袷もとさす　外言
　　げつひきもてる和月ゆの末　翁
正云　帝衣に三月着す出手有て　灰止
　　けしの葉の旧月中旬　水甫
文月　正月も巡りまろてれかさり　りね
　　座行の蓓旅の旧月一まん　抱コ

〇異名の月並 去秋之字

巻之八 月並の月ニ表又言伝せの歌二首ある

▲コハ古式をそなへく蕉ノ門の名の月並門生る 蹴

ゐ一兵月並ニ出ることの事のきまり

新 ハス 新年茶つく声の陸奥まで キ角

月 月の蓮葉人もすさあすや 似去

〇春夏秋冬字カハリ 歌不蹴

御飯蒸つゝ冬ゝ向の 許六

作 影陸奥の遠を伝来て 羽

涼 キ公 去も次すゝ七ゝ雲ゝ 嵐雪

夏みゝれおく掃を初て ヤハ

コキリ 夏ヤ アキ 門ニ表生す見の たそれ 羽

雪ゝも秋の日ゝものさ人今 ハ

鬢 秋冬 髪の中ニまゝて 去芳

秋冬 ゝの ゝゝの ゝを ゝ 寺秋

俳 秋公

小田の秋しれ版古寺人 角

惜むゝゝきまる 岸白

九十九みれや久ゝの去 方九

式夏の角ゝて 晋ゝ我

ムウ 夏秋 尺新ゝの花の一 村 素秋

四庚すんきゝ秋ゝを 巳左

去の旅串柳ゝて 角径

小弓 夏秋 稲さゝともを 夕九

夏ゝゝ月ゝの 柳子秋の風 左次

〇春夏秋冬字各立去

去夏秋冬の四字各カ仏ニ三ツゝ伝あり

去ゝ カ月ゝ む二ゝ去一ゝ去ゝ夏冬

の字も夏ニ冬ニ 仏各ゝ合ゝ

カ ハ九ゝゝゝ

ハ風ゝゝゝ ゝ汚をつく ゝの角

其伝 夏伝の ゝ夏ゝ ゝの月 白り

焼 ゝ ゝゝゝ ゝゝゝの去 嵐雪

反衣

八去の拍子の　山部　長舟

俗にむ去を付あひ　支考

十雜形の北に去を反付て　左把

本部

二反大根の極　　逢花　像幸

用ひあれた　反の俗さま　比流

炭

然谷の性知る杖の形　岱水

まあ去の一人もこえぬ面の杖　ヤハ

杖塗

村面い杖のおそそ山　風　柳士

下地色より　杖を取て

月のうる俗まこ曇の杖文て　牧考

枯

収られんとそ反角るあり　嵐雪

俗うこ去次面る角の月　李知

去集こ去字三去る老八あり其余仮名

ふ〻〻ふ杖のそ　東谷

杖　杖次うる　杖の部風　伝化

俗集う垂こ　人〻の杖　、

白白　秋去

きそーうの声も去の杖の坊　考

余杖知る俗部の杖風　定後

杖あれや紙の白根を忘の色　化

去反秋を字南る角

去杖のそを用るの多柄おく世季言こ困て

去仮杖仮く用る白あ〻角る反〻そ入

ふれむい杖き俗くさるきるあ〻に一も仔寺

続花　真垂て先房れの作を夫　玉夏

石杖の垂の人用い去仕人〻垂杖そこ部寺

又紙ひあそうおうる仮「仏去系四水あそ〻き

仏部く部の俗く去ト用て垂を含やこ

り武ふこ旅ト去ふうも去ト去こ反乃

余時を含て部あ〻仮去と去用るあこ

部仏出る去そそ西白一

白　黒仏草　甘の一〻る反の月　反村

呈白俗衣の余時く部去る部寺又除一部

明「ふ〻し」仏保一部の石を反字こふふ

廿三 秋乃鳥の人々ひとゆく 翁

是春の作く又「桜見」「蓮」「寂寞」「是込」

「其許」「朝伐木の」は秋と用ゐる仍多し

冬 冬乃朝日の哀しけり

事なりきくちて此外「此床」「終日」「枯裏」「事未」

未の用方拍て春乃一「百事」くも方みきる事去

秋字を用ゐる事なりき

△春秋用事廿去 三十廿七張 ○八

廿五 翁日用事廿去春て此る他季を入てあり

春一きれハ去る体てもありた

合レ 三十去 の春武を述て行て力仏表廿七は月乃て

秋三つきウちの定座は月を寺付ハ乃て

も秋五春にあるく其余は他季なきとそゝるの

月を看むや折月花ハ数の定あり他季ハ

定字ハれハ投よりて其余は夜ハ当季出き

るも又何なきもあり今日何ありあく

去 ア 菜ありなりける所や見ておく 旦暮

ナフ 萩ちり蛸す方白のをよ や水

秋 九日虫秋の おのらき月 呂風

「 みわむのてきのもんみらとすり 浪化

ロ 名切 「とちゆちなしは月の約束 岩旦

ニ ○ 「友びてさいを所かる花角力 一

ス 許おくむ世の私の連ひとひ 友之

ロ 三ノ 「落りやこよる月の宿りし 去水

ス 神ありあも春れる性の翔 り合

ア 信 西日かもむ尾の尽事 床 相実

ス 崔 くえすや宿や今湖尽りし 乙由

ナフ 萩孔株の佐も咲きけり 涼ト

ス 山夕 「名ちハひかんを見て起きち 百枝

村所の雪ゆ雪隠も見霞て 東羽

○ 冬 「雑居す七分乃母 三五十 や水

ロ 家月出たる多ハ 楸ありく ト宗

去年去ハ一方ス去年 ○ 此去ハ此みはあり作ハ

母てまめるゆゑあり

〈夜冬四季二去　一ヶ月六去　古八五去

奏三　芳ゑ四季に初て出るなり

ゑれの花今よりの四の害とある時多し成る

今の他紙の去秋に伽の出るなり夜冬に出る

きえ〳〵文日書秋に当候く成る出る夜冬に

出るつく成る出るきつき成る

▲許去の出る日に移るゆゑ朝保門分去

ゑ花二去の伽あり「東花」「梅山伏」去秀の出る分

ゑ出る二去の伽あり「東花」「梅山伏」去秀の出る分

ゑ出る二去の伽あり　初羽

一也い三去〳〵出るひて又二去に伴ふゑ保ト

十文字の出る伽あるゑ出る

作　十ゑの伏り　杉巴の秀を　羽

の出る知ゑ声を美ん　西重

匂　先立丈する　ゑやの約せゑ　季

移つむ昔の出るこの伽ゑ　伴去

朱む　出きて移イ　すもる移ゑ　夜秀

一面ゑ木りもつて羽抜る　夜中

ひき　一秀くる白いえゑと書れて　乙れ

一抜あるゑれて　抜去

移の出きの伽付ゑみる　桃妖

射　一出る秀の出の書ゑ　自吳

一出る秀の出を　抜　千

桃　大徒の移を　杉文

一弓ゑ　イ次

一出ゑの移の　移の

コハ　一出ゑの移の　仍杜

一ゑゑ〳〵ゑの中の出る水杜

きゑ〳〵ゑ吹の中の出る水杜　、

食詩　述懐の出おけ　朱弩

一疾妖の色を　伴ゑ　千石

〈他李カ仏ゑ五去の伽

他李を中に用ゑる出の移ゑて出る夜

ゑ一方出ゑる乃方向出ゑ　れ力移ゑ夜

き食ゑ十八去の伽多イ　ゑ氏夜李を加ゑる

生子和と被こ生て人あり白雲の白雲はの形ち
一 鼻の先あ[illegible]れて大油ぬけて来る 此亜
と釈戻てあ[illegible]ん ちく 支蜜
白白くうちてこ[illegible]
り柳 仲マキ 支二ツ
和もを[illegible]ちとうこうる 山子 、
和の四うる菜畑の 蕎 ホ乃
和く。涼む 和の板の木 蕎
日雲の涼し 吸角飛ちて 仲子
振疫やもき丸 青の舟伯 、
叶ちさくやと 牧出 行ケて 蕎
和亜 和ちのき中こ 他事ちの 苔ちあり
△丟秋の事をいふ合
立 ちのかるむの形くり 亜径
ちの字き声こ 吸生 二個
ちの形ちの かすこのち 二形
ひさ
△和こ花こ 行ち 居五く 仏花
和く ち 余白 丟ちこ ちの 仲と 又ちて

和ちの ちを 行ち ち く て 丟秋の 事を引こ
月花をいふ ちの 他事 ちく 生事ちの
ちうこ れ あ て 丟事 ちく 叶ぬ 形ち
不こ用こ 蜂 生事 事の 皆ちの ち 丟秋こ
り続こ ちくの ちの ちこ 和こ 生る 事丟の
丟ムこ 白用ちこ いこ 丟人 芽き 限く
△素丟カ仲こ 白雲こ 二
白雲こ の 丟い 形こ て 中こ 生事い 或い 秋発
ちの 引続ち 他きの ち 白 こ 生る 叶ち 或い 花
表こ 出こ る 付ち 又 仲ち ちの 事の 入用 ある
叶ち 表ち も 行ち も 侍の 表ち も 生ち く 仲こ て
も 丟こ と 丟丟 ち 叶ち こ カ 仲 白 こ 丟 丟 ある
叶の 中こ 出事 ち 白こ と 二 丟 ち 但 カ 仲こ て 丟 秋
出ち る 叶ち い 丟 丟事 ち 白 ち こ 丟 丟 秋 丟 丟 一 ツ に 上
白 五人こ ちち て 丟 ち こ て 丟 ち 抑 ち ヤハ
ひ ち ち く こ 丟 白 の 丟 義

猪之

信川の月を力に山さくて　義
そそ〳〵を久る　雅の勢　ヤハ
ちく〳〵成る　ひあかの恵
多くの人ぞうきを拾ふ　保和　キ角
仲のみの日うゐ　松をひく　百り
玉造信元そうむ　古郷　嵐雪
懸の力も　巳寸　於菊　角
を信の美名　美名　角　り
白日の雪をさそふ　鄙の歌　角
御しうきさきの　の相の実　又之
雪村の柳　ゑく　挿さて　キ風
梅のさうりの陰　の　用　似夫
二月の菫葉後　きあすや　二舟
婚さう牛の　蓋き日の　柳　千り

十七向
二モ了

〈季移

季移の両季移しうを宗とす民間とび
花と白の仲まも移しう深い方移しうを寒

れ秋を去まあり蕣袋加い花事用りあり自生之
戸般春宴代ホの去秋之所の白期を　ろ
巳の去れ之依二キ移い力化之我不もあり之事
移い方低之二不乃白之二不之花キ移い方勇り
手春之手白猪も二キ之る三キ之る凡
乃白猪已上い移く或い反秋去反秋去反久
秋去に去秋之に月び之猪之去猪之反う
之之一方あ之俳諧一又反去之に之秋反に
月の花之中一去猪之他キを猪るもあり
又去反秋に秋之去に去秋の中一他キ一白合る
時去猪の猪一猪れて無と矣之猪之猪るキを
用る之中の他キ二乃猪る猪る手用あり之て
月もひも之去之秋之去之反之を猪て三事
移すもの之きい月ひい風雅の眼之有之
あつ之山や之浦之て夕涼　義
由松之りそ之む芭蕉　不玉

あて　○月出い関屋をうむ西拾て　ソラ
表　ア　出りの蕗のけ杜風　翁
辛　、下して恨こきてうを柏　玉
一　あれのむをうるこの毛　ウ
、名産蕗る移間の蕗冬葉　翁
毛日保川るるるうこキ続あ
拈　ナ　結刈しやアの友お　カラ
ア　杖の投乃もり〳〵生〳〵ハツト　横ル
麦反杖毛字い月立て拈て　六六七月
ようる雑教を為る反おとく形生分て
寿　フ　まもえや立ふくと蕗うり　東お
ハ　屋敷の征乃ろろも　白社
ろもに泊て拈て.
〈反毛移
金　フ　麦花てき屋敷や畑村　翁
、　みをさうようさんさく　紙人
ナ　立の出翁るむ犬の春返て　理人

フ　蕗るよ法毛めとう毛寺やち　梶里
ナ　昆ろの使ようの〳〵約飛すし　牛影
のこいろもをり雑いろもあ
反　フ　麦　紙のおの弟ようて　巴文
ナ　さて十戸いちこの拈ようて　乃川
嚢　ナ　麦のおつろの山村白　支考
フ　布ようろ乃白同の実紙て　芭川
いちこいれお布ようろ反こ
ス　ナいもけをきはのぞくかろもさ　麦を
フ　ぞろしころの百日教寺　仏社
かきろに氏キ吹あり財ようけあきはに方の蒼
とろむようも毛の結交とする方を掬こはこ
いるはろて木を一きあようを出ようて
〈他キ一白接
自足　秋至て蘇の干およ毛却　キ角
○　牛の侯をたくく夕月　北
休しきや二不拾沢の薮の色

フ 芭きをおくに焼掘の白
△仏さんに木化は住するを乃此
二本 夜うすむ 入お
ハタ △むさくひんのくいちりこと 示弓
ちあるん林に五本 昌柄
垂問する地上のちる柄乃を 和竹
れ実表の未熟おく 子垂
ト初常乃後明の色を強くそ 仏豆
毛部屋の位を使す出代 ウ中
人の口口戸に明てある杖の風 寸昭
○廣ん毛鬼と目い斤彼 乃考
着作もゑむ西行と明ゆそ 基二
白為 ○り灯の光も薄き月の照 後徒
明おさる松斤のく 林和
厂みくつるの杖を見こ 夕兆
フ 小仮う出て字きくるめ お麦
△花もまと青乃ふくに ふこのを 東星

毛部をさんと次ひる風 河猪
ひるるく原氏陸は舟写 嵐考
△巳キ移変格
基 フ毛の日い内を毛の傳をえて 基文
ハ 琴おある柄乃葉さ 基豆
、鈴毛表生とれるお兄 イ彼
、衣兄くまいひき毛 戒人
ナ叶毛初毛まるを化粧て 義
○乃恒の月ユ年 思毛 炊玉
ア氏里い板する毛のさくく 巳百
、孝ゑみひをおおそり 用呂
雲栗ユ十一フ五フ二八三 巳キ土徒ア
ナ 楽くくおりの雷よお仔 清風
、夏やせる兄人の客裏て ソラ
ア 弘ふる日いお云孤くく 美英
○入る月や申乃の方英もく 風
厂を故て彼る艸の戸 義

拾
ナ白
考信
友
ア

カイ印三

二丁あまの原てんそくむちうて　英
去年の畑より芽葉めを出す　ラ
植れて去てふ事を傷めくむ　ヌ
大串去るへよ去の名をきく　凡
夜の花き連歌一両句　ラ

〈南季掛するゆ

季 月むの句も張すは季の付句ゴ丈季を集
するゆ南の三三句浄き時い南季を捨て発句う
掛すへ〜後い掛る前と発句を定て門の花とあ
ちひもと発向を定て橋の月とあらふ南の
三三句を浄き時い南丈南季きう掛て花ち月
南の前は一句の風情を定すへ〜けこ乃
掛方い大うり変化のみ句あるゆをもるへ〜
発民季長はるゆを知へ他士あく今見い友閣の
来れもと床ふい冬のむ生をケ付おれ答
洲て字と入休は洲於唐をりてんめ〜く

指ふる家五の汲をきくふ去年の孤月ふ掛隠
改とあらひ飛ふ洲ふ洲ひきさ多爰をよせ
ふ句は南のむふ花田む塗をろ生の前を
多掛前はきひ帷子の近ふ長大行を出家
改ふ蔵早をを栗麺掛干も季ふ連て
笑とへいう栗坊主豆男も秋ふ法ふ〜とや
月毛弱月家或い月の九天宗ふ〜あ月行
を三むー秋茶宮ふ苦ふ茶小茶紙も焜
ふもふ桔梗い改ふも浸ふ一主後て
庫の主茶を刑む熟一社の他性を入ふ
季ふの句史はむし又作ふを母む徒ありて
実ふ宗陳ふ形ふ改花ホの上下の字を二ホま
分用て是を刈季ふ長ト四ふあり都て丈
山の雅とふ丈花の主とふふを多守式い
極と加嵐とあじの云を多仮人連を雑へ
さふいふふんの邪ふをやあれいふへをかく

足さる　所あり　むと　宮さ　古ハ　ハい　淫ら　わく

△春　他きを　弟キ　ニ　扱る　仍

他　足知る　才知　子の　所出て　佑基

ひき　協協の　ちまり　つちき　出て　口通

炭　形畑の　あえる　所つく　字の　上　コ所

、　枯一　柳を　今コ　ちーえて　貸水

強ル　そよりいおう　蒙一　他の　兎　佑ホ

枯　手紙　すき　尺　板の　掃　挽　カ弓

森　陣ニ　あすい　衣交　ヽ　支考

小弓　動きの　ひちり　を　て　家ろう　如り

自明　弁衣ニ　除を　くく　祝門　風竹

枯十　ひるね　する　裾ニ　大樹の　持れて　幸平

△同　季を　佑しる　仍

冬　文字　乃日を　家も　門く　翁

文め　月の　白さ　の北　西門の　子をつあり

、　柏ハ　う　脇　所る　国の　灰ある　兮

雑　カ　ニ　ロ　ロ　ロ　色　弥　やる　所　所の　ニ方　フ　舷

、　トリ合　けあひ　ニ　法き　黒　鶏の　声　鶏ル

七き　ニ　号　ニ　を　栖　と　る　く　ち　つ　の　ち　一　ス

ヒ十　コ　ま　コ　系　猫　ニ　の　ち　猫　と　ち　ル　作て　翁

白兄　、　隣い　男　猫　ハ　ま　い　ま　キ　角

仏　カ　ス　ニ　ニ　ち　く　む　ひ　ち　も　ち　い　ど　ム　イ　ち　ル　ち

種　ま　ち　枯　ま　る　同　價　の　ち　る　れ　や　千　梅

ハ　ル　ち　ち　の　ち　ニ　一　ル　ま　く　ル　ル　て　ル　云

ち　山　む　白　弥　の　ち　麻　ニ　ち　て　ち　う　の　門　ち　邑

ち　ル　ル　弥　中　や　ち　ル　む　ハ　ま　ル　ま　ル　う

ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

出　タ　ち　山　孫　ニ　旭　の　山　も　ま　ニ　く　く　ち　ニ

男　仙　り　ニ　ち　ち　ち　ち　の　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

十七　代　仮　ニ　ち　ー　ち　男　を　又　ち　て　ち　兄

ち　の　ち　ハン　手　枕　い　秋　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち

又ハ今百付原ニ又ハ作て百挽まするハ
ハ雑ニあるし

△雑のおを季ニ仮ニる例

岫　飛の信ハ季を拾ハせてう　乙由
柳原堂所蔵百五の内ハ原ハ雑ニ
季ニ連てる雑ニてお伐も時ハ挽ハ生新
信おの信ハ季ニ仮令風の柳ハト作てる雑
しさるを季を拾ハてうト作てる一原の信ハ
さうあ〳〵ハ柏を使て号の所季を拾と
うあと〳〵再ハさうあれハ二百止の曲ハ
雑　一原信ハうと雑く釈又遊　山りと
仮原い仏家の子あれ雑句信ハ矢拿ハ文の百
の法集の中ハ引ニ足常寺ハ芭を有る歌
ニ曲名ニ用ハし法家の季ハ長ニ仮原ニ出て
うハ古式信写の法ハ

△反　他キを弟キニ仮てる例

ヒナ　まひ百し原ものを素写ニ反挽　虫子
おう　てうあの三ちんニと寿重て　枕りと
反　雑あ〳〵あとの百のもてもハ　許云
△同　季を拾〳〵てる例
むを　風カ　百鳥　ハ　ハ　名信　月　月　信　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　三匹　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
あ〳〵ハ号を〳〵寺風の号　箱
八つ〳〵七つ〳〵ものの〳〵め　二角
鶴のものしの力あき　風　信ハ
名信　神もはくびのあの目〳〵く　枝変
月残る枝ハの大月お月て　イ指
信ハ　本ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵い山ち　反原
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
〳〵

〈秋　他きを弟きに語る俤

杜白　焼めしに九の粕つけ口あてて　弟

お　ひとりのわのもえ抜ふ声　、

読九　大根の育ぬ畑をふみれて

郭　炭窯にわれて香の　梅　杉風

キソ　ゑるてらく　捨うるらく　、

拾　次初のわろふんにえりり　青丸

いそら　ややつるせるやめて山比　故白

茅川　青の青子の日も拾ふる　臣吾

白角　口切をまつい茶の用の青く　之士

艾陸　菓の二えんに蓮をるく　支考

山中　生るもみめも皆橋木く　里臼

〈同　季を落しる俤

呉合　許されて甘中の中の青仇う　翁

読九　夏の世青い　青の作

廿九　多二斗の地を斗るく　去来

白、　失つてくるのお成　嵐雪

、　菓を足てうるる氣ふん　許亡

冬ソハタ　ゑとしきくまつ　佐手の　坊　ヤ水

白見　網つる衣ひろる龍の青　形菓

読花、　すり木て粘ゑる兵寺　コ岸

呉モ　何白玉の青去もく　可及

あ　三月　初の石所に佐垂ふいかし　ヤ水

十七、　地髪て移ふいかの引　余　孤松

、カヤ佐　もやつ　ふの仏ありて　、

、ミカ　ふくまる上毛の星も青毎　柳呉

フリ　五三と引てきもうて　什司

教ア　平げ三弟ふ弟一粒　大町

反杜先　ゆさあつまのねひ笑る　因友

赤山呉　笛の青の冷ふ風も青佐て　大川

白角カ　又拾われて頬へらの　砂　コ松

拾杜角　彼角の方きを佐ふ　ふむ　友五

青　先　ひんている　青を拾る　橋下

雜（ひるま） 戒名考てみる意人 佐藤
、 如川上ゆきに隔く瓜 茄 キ角
十七番多コ 瓜をもつ雅うは昼のねもうがむ 北秀
△雜のわを季と分くる例
白タフ わ〳〵と萩ず恢の四方位 小枝
萩のさくわ〳〵に仏を食うくる曲音の限い一枝
限と処まるるあ氏さる之氏わ〳〵と梅屏
わ〳〵と抑樓あく あ之用る人あ〳〵始て用〳〵
手拍あれとも再用おい加あむ 京多 梅ず恢ふてう
方 菓座のう〳〵も今花の 杖 桂花
くキを結〳〵るい手細あ〳〵
山琴 白高の玉の芝蕚をまと居て 足務
京五 玉の芝蕚い玉の名目あれとも和句と植おれて
芝客を南キと用〳〵きれと白高と季と拍花
〳〵れい芝蕚い雜〳〵て植おの雜を垂れ〳〵う 姉
京六 竹木を秋の重と芝季を拍あ〳〵古拍い生氣

植おと嫌きとやれて雜とあさい位あ〳〵む季を
もと二句さるきるやはるる絵の月嫁の花る例く
△冬 他キを南キと用る例
ひさ 月おる所きの出乃 天白 正秀
例 君位〳〵 残る 枕 西生
△同 季を結〳〵る例
後多ムキマキ 一とものは仕ものい麦とをきまて 義
句、 植い仕ケ〳〵る麦のあ〳〵去 許去
多負ムキ さあ〳〵つむ〳〵るあ〳〵ふ り角
年新、 〳〵ぬ〳〵ろく 四〳〵い竹のおる考 喜平
素加柳 ケ〳〵おれとも〳〵る 柳 く 子結
芝新 宮と おと〳〵く 長性 大根 や者
ものを声 紅も松もり 声てしてとる 位生
京七 同季い三句去へきやの
著〳〵古法の流行も同キハ考去の定法者と
五句〳〵くおい五句去て三句〳〵くおい三句さるへきこと

今の他社の者法は去秋に三百日に限る故に一
二百あれども矢幸の季者の跨る所の五箇節
されども百日の法に従へる式にて連年の旅を
いろふべきもおほ抜てきときの者去るも百日
いまの宮あるも今ゴ化と結ぶ月秋の所ちやきられも
花の者せもきう月秋の所ちやきられも
加に今の二ヒ二月も待むと宮祇の時勅免
を古例に引て古例に例の門人を攘やされき
況や今の結月の二ヒ二月に於乃ま待く
去秋の季いとも式に二百ようの百に限る故
あのきも一百ようの二百に限て回ぎ例も三百去
と宮ヒ人きやされと百稱きとを其者に南
季の用ちひ去度の死に宮あれに去秋に決て
三百すく元に決て二百に一月ヒの者に
ヒて去秋を百に続てい去度の死に宮あれに
其キに三百も者へひやに今月秋をお所

ヒ去秋に去度を海外にも其去秋に三百に限ヒ
も式の天くんの式を所詳の右経に引て
ゴや連花の宮居を知て去秋を二百と宮る
間に名称の行の右月に引てヒに又月もく
名れ去秋にも二百の古例あれに今に式の者
法に二百無ヒの月花の会釈に実数の
例に引てとゴ一結に力例の式にも今の
結力の者法にヒに今全法の者に入す古製
の例あきもあまに今ようの我門の宮去度
い其法の所序を何て用に人の月立
すて用さに例の三百立とゴ
抜去秋に署多に故義の宮を去て長一例
の法文に宮に宮自己の乃法あヒに彼又
抜法の者に宮を勝手例に者の所序ようの一世の所
後に宮用抜ま一百世の門に宮に宮へきに
氏条に去秋の所序の抜製あるに一宮の法に宮

て後人の定を仰ぐべきなり一説の別なるべし

○白石氏万仙の年代の式を数へおるれば前の者法に依て春秋の五去を二去として二去を一去と為る事勿論

○想ひいしに亀の形製者れば春秋に者三去と云ふ

夏冬に拘に限用ものなるべきにキ三月上てもこの二月と定め白去の去夏秋冬を去と云ふ

二月の万仙想ひあの形製あるよりは仮令ば形去と云ふ去を春秋の法を考へるに春秋の法を考へるに春秋の法を考へるに春秋の白去を考へむ

みのくるべきは陰すべき春秋の白去を考へむ

式の条目に同事に白去きやのるべ事うしいら

なれい者も形ぬ去秋去を三去と為るやは

万に夏後の条に宮あるやと支考の心を察すん

に想ふに春秋去の法を用ひ時は又秋去と

用ふ者あれに法を減じ白去を考へ季を負生

用むと考れば去る時い想ひの日と

月との名は白傷むと花との名は白あく為て

支考は秋も又去の自生は出されもと云ふ

名れにやく去りされと支考生産一去は以後きに

箱も五条に二月万仙式を書て自い級みる

仏は数て支考後人の名浮を作むるに結文

に授後の斉とまは何と考へ宗と云の

法門人の世評を何て是を用ひと名物に

三世五年仏法を又五て想うの月ひのこと二百

限は減れと日キ去の法に用さるに被ひるよ

学て稽まとりに世後とまし蕉に故考の志あ

らむ去に出教さきむや今拝撤書校の書後を

人号式毒に殺うりかる人の性をきく枝に乗れ

も教ちく校も減て他席も乗れとも又

才三の季に於ては又云ふ実に三度ある

ゆえ支考の人とも思に生存するにあらし共

支考に逐ひるのゆえむやとも二原の人々二百

後の者法に乙の季語百五ある体を用て三
去の略式に乙の句作不能時より用さる時に体を
法を彼の罪を其祖を改されい勢て改革せよ

△雜の行表記號

谷水の宮を七りて花筏　りを
義ろけよ　おく以在　りお

ハヤマキ
キナセ　孫子をてくの熊さの茎脈　素鵞
鳥の拍子は情も一さ　仲去

弱の力仏はキ九八出るあれ熊力は十六人あるき
まろ情て勢古老まを未季も多く事あも歌は
出きでい生産句作は自立を乃る時きろむ又
季に乃を写記まて〜はき自花とく有は出を
おろの又出まもてらて各季寄ろろむい
又ろの分めを生を考れていると人ろ〜

□雜

寄三 和哥の集は雜とる数もあり雜体とくも

ろて連歌も又名を付ろ今の他所は出を評
する時に雜の不句に題の用ろて正季の部ちの
曲名といそむ・今掛する名あは雜の不句とい
一句は又仏の名を出て又風俗を掛て拙又南キ
を結まむとする時に姿に必穏あるす　知的

ダ三 先門あり付寄ふい神祇釈教哀傷恋
本情部お意振名仏本の句い恋の格ろきあ
出を多ハまむと思くとも多ろ〜ふあくとき

ハ三 又恋キの句とくは二ツあり一ツに恋後表祖
季とろきあり一ろ季ろるのは出を又月は季
とくとる一句は季とろくるあり様の句出を

▲去来に雜二体あるといを古今ふは今一体
所て雜雜体恋格と三度は名を分ろ
出を体出の弱ろ後まて〜ものを

△雜　表祖季あきを
名示　名ろを雜松蕉を所ん　義

名不　格五や文隙のちゑを老ひたる　支考
衰　衰をして見くいまの歌うか　去来
き　芝生の草まぬれてあく秋ら　〃
名ゝ　祥よりきたのうらや衰の山　考
歩く　隠ゝまの牛よりもつゝし糸な　〃
頃情　文と美筵を衰の行乃く　秋房

[本云]　思ひあくいの白い梶枝そ枝実板を房紫
ふりかしあきまきをの白い「麻」麻ゝ之干雅まの行で
行んに云をゝて季を隠ゝるあく　鶏

▲かくいるゝん若きまちなく雅に白ゝ季を
隠ゝまゝいるゝあるへきやアゝ行板ゝゝ

△雅体　季あゝてきの用あきをいゝ
名不　掲斗角ゝ分ゝ隠ゝ　義

[本云]　荘子ゝ蜜鍋の西ゝを花ゝ原氏ゝ文境云隠る
荘ゝいる河ゝ云ゝ云ゝ花ゝ尚も恨ゝの弟キまも
拘ゝ云ゝを雅体ゝひて云ゝ白の格ゝ季ゝゝ

隠ゝ　杉ゝ苦郭ゝあゝてゝを花ゝ　考

[本云]　三ゝ角の三花ゝて文杉ゝ郭ゝ花ゝ郭ゝ季ゝ苦ゝ
白作の形容ゝ白ゝ文世ゝ京淺ゝて雅体ゝ季り

△並季ゝ格　季の河隠ゝるを
墨　ゝゝやゝゝゝゝて雅の面　義

[本云]　云季の格ゝ白ゝ常季の河ゝてもその
季ゝ世ゝ白作をいり

[本云]　五文字ゝ並ゝの云ゝゝ格ゝ雅ゝ家ゝの
河ゝれゝ季ゝも雅体ゝいゝ[或]季の格ゝや
いゝむ松ゝ雅ゝひ雅体ゝひ季の格ゝ今の形
製ゝて云ゝ今の他社の名目ゝいゝ

▲[本云]　廿五条京ゝ形ゝ云季格ゝ挙ゝれゝ雅
体ゝ形ゝゝ兵ゝ季ゝ委ゝさるゝ寛ゝ
ゝむゝ季ゝ寄ゝゝ姫ゝ文ゝ引ゝゝ
雅文ゝ隠ゝ合ゝゝゝて云季格ゝ名ゝ定
ゝり「　」の文を隠ゝて云ゝ時ゝ云ゝ格外ゝ

係素堂のおとゝ〻僅五丁の冊中に四字不
字表 又表示あり又表述いうときわう
盤 四字表も反こうれい 嫁ゝ君 キ角
、 君ゝ代ゝあゝや野世家の稱謂 許云
〔ハツキ〕角を嫁ゝ君と稱して本の二蝶〜と書之野の
隈あゝてゝあゝ〜野世家の布袋稱謂あゝ
そ又使ゝる風情もあれゝ初春の見ゝいとめて
〜き教あゝむ時男之入て吾季の隈を繁あゝ〜
古モン 稱五て稱ゝ之ゝ之の百枝ゝか キ角
吾季ゝる枝ト数ゝ生を〔格外并〕雜体に入ゝゝゝ
花瓶 ゆく乃ゝちゝ之ゝ枝の吳〜き さよ
コハもの方ゝるを情むり春の比之ト存り
いゝ之ゝて祝き人ゝの松ゝと存て
友 家ゝ皆枝に吉ゝゝの れゝ集 箱
、 世の中ゝさゝに宗祇の舎家 、
是時ゝの古ゝゝ之ゝ吳ゝに世ゝゝゝゝトり吉ゝに

時ゝ只時ゝの隈ゝ句ゝゝゝあゝゝゝゝ中ゝ時ゝ時ゝ時ゝ隈ゝ時ゝ
あゝて白ゝ吉ゝ字世の親恥ゝゝゝ蓋是再来ゝ
ゝゝゝ舉ゝる〔季〕を作ゝる俗ゝモ吾季格と
五ゝゝゝゝゝゝゝ作ゝ一件ゝ

〈ロ季格

七浦や一字の数を一字ゝゝ 又新
〔表三〕ゝゝゝゝ雜ゝゝ決ゝゝゝゝ情て雜体ゝゝあゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

△百雜て雜とあるおい日キ載不雜

[東三] 後い良人の所一部とも友人を所蔵と称せり
ともいまむ古おい姿所の用を分たれ口に有を
殺る所ようキとキの宮ようある所多イ今ようまるよ
丈用を考い殺るも殺ぬるあるもと仮令殺し
とも必古所の写を云虎寸二百ろうるを用後
すすすさとそさ気い雜ととそお紙る日キを
生ず族い今の後に及ちきしむ
▲点い所も出ちと雜ろう二百放て雜とあるおい載
に向キを蹟寸蹟よういて雜とする不後られ
ろい支考も雜初て毎に日キ載を殺ろイ口く出
ろい考の口さやさい自後を引て殺ろむ
ハある雜イ考を考ずる名お弗 まラム
ケテ
・ヒテ
ハ 以ちされぬ考ようそうき 号那
まろ雜を号ろ考の考ろく 須年
雜わろふ矢先の後ようあく焉 キ角

白兄
・必ライ
殺品一ツ又巡 作ー き
ちイい象母もろある低偏陸 古後
一意所ろと云ろく殺又意 山り
後の男たびの白さよ 考及
・百ヒエス
殺れろる十白陸ろのつちんや 事後
ナ
ろろ杜母の名を弘めんり 土芳
他
・扇
献ろイ好ろるのちまみる 良不
扇の角をつろ寸意ましし 風麦
麻の茂ちイれろ天豊
自品
・文人
舟ろる南い移ろ後のろ 杜之
白開の後の連ちろ ま之
・モ州
ろきろ一意のきろるぎ 舟
冬苔
殺ろわ一後紀ろ一ろん義 岱水
風イ横ろる仮きも今 移風
・ヒルる
仏さひるわの異茶ちす 基二
三矣
ちろんの後ちおようもも 伯名
ケちのつろちれて月お 東京

猫

枯

芽花

西花

ムツ

十弓

手とり　白力仙　たひ人のそれとなく問ふ　定夕　東枝　芋舟　敷物　敷物の目の川向　伝水　移風　菜根花　菜芋　白強の園に自を住ふて　兆而　名匠　菜芋　乗ふと　物の下　菜　更紙　物の市の居下　り由　天杭　するくと大杭の市の居下　許云　匂　嫁う戻て　ふ　口　白んお歩をおとて　八寸　きしの東る池に未のきをたし　お枝　鳥多　毎日用に吹の物の　牧童　井り　ら杭う成と新そ　松所　芋月　芋の杭屋の芋うる　松原　稗おに大名戻をおう

杭云又拂　土用　八ち　松寄

△実秋の庭ある季を雑に用る俳

実　山の手ちつ〳〵初り恋　義

実会彩あれとも名をきゝ知らす　翁

茶　茶の新留を煎に点る物の法

芋をこゝ中時付する　雑こうゝ

件いまゝ　を書足杭こう

冬　雑こうの日こうて雑を伝ある　や水

鳥　お除こあとなまし　初鳥

葛　去年と拾に夕干の去年見　蔵指

ひき　西風う手ての小見拾もて　伝士

医考　鶏に入こる干たちこ人まやく　一炒

雑　やしみの庭一雑るもしろ月　杭泉

百物　あこしの庭こで亥の庭匠　風竹

雑一　串拂ぬきに吹月も　百　手敬

葛　去年の庭と陶のおを拾て　仲陽

炭　てこ〳〵しも拾る貝ワイ　嵐雪

音　樓ハひとんるみ〻も生てみる　除風
読も　所ゝ立てるいとゝ〻名ゝるき　春風
類　いとゝ〻世の大るやうゝし　文志
去　宗てけれの子ゝあゝとゝ〻　思少
葉川　ゝ為ゝゝ人のえゝえぬ所のそ　支考
白鷺　我尾いかの男のかゝ木ち　、
勾　能ゝ去られ姿の仍重て　存公
青白　芝ハ伊ちやと又るゝ山　芋　彦五
巳号も伊多ゝれゝゝゝあんおく古人の活用かのて
く千書ゝ化ゝて猫ゝ一人ゝこゝ物をもちて
ゝを加ゝ新四伊人て

△雜考

雜の表ハ雜ゝ表の巳伊書ゝ巳一ゝあり
或ハ雜ゝ表ゝ書ゝ巳りの弟キを生ゝ巳ハ淋ゝ
ひさこゝ三月の残ゝ雜の書ゝ千立ゝ
ゝゝ又「ゝ雜の書ゝ去キゝて表ゝ書の
始ゝ為ゝ巳ハ淋ゝ必書ゝ書を生ゝ限ゝ

むゝ一ゝ表ゝ表の内一季ゝゝゝゝし

ひさ　表の甲ゝゝゝ時ハ仍る寺　乙初
只牛ゝんゝ風のゝゝ書　孤孤
一ゝ為ゝの本初仕まゝいゝの来て　り来
○独ゝわて奥の名仏き孫の月　昌房
斗ゝゝの風を畑中の風ゝて書ゝ
拂　○月表の柳ゝ花ゝ子欲　支考
面白き世ゝ面白き人　吾仲
候ゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ホ白ゝ巳キの家ゝを宗ゝ　芳雄
ゝゝゝ伊書も奥ゝゝむとかまて雜を
つけ表の終ゝ云書ゝゝゝ
ゝゝゝゝを出ゝゝゝ仏時き扱ゝ

三元　他所にまつる春一言の尻　涼ト

冬の嵐うす春の名の多き　支考

○あるく只あるくと云て歩て　反朱

嵐に花おもいれきと吟ずるまつ中の吹雪

陸と云てあるの歌おもひうく

文暦異式抄

キク十　箱の底ぬけて春くれ二見形　万子

墨恵ものゝ打て見あり　伯元

ア十　弄仙十色う菜の白咲て　其二

、秋をあめつも寄のうく　橘朱

○作句て鼻の穴と月のみ　路ウ

コハ菜十品の根ものと菜花の恵う文机をうるの

作れい文句を白きて者ものうしおすかい者の

三月式一言に二月九仙と是式の始とえ

ゼラ　姓さもうさも作者の格の寄ぶ　二

除さく網をもりて写　梅夫

△月元も貴く祈ふられるて　青平

ハ　狗蚤乃中ま雑も寄ろく　仲志

京ニ　式歌ま雑の格用と雑疑まて阿字の

言を写ふ時とうく変まて雑ま始めて

さいて四季の余興あゝ雑の部ま歌石ろ

ちひ安ま掛するまれ句と稿とま記定の二

格に式用あゝひと除さく網を法て口ろと

ヤ作れい網の字まおのつく二句の乃ま雑てあ

い恒ま飯おの雑あひと座の瓜浮い字ひぬ

シ尾　ヨリ出よりも写出ま和者の山　遠に

十七ヒ　ちる名い打すむ和者ま　座文

ハ表い形芝も常の手を付て　古能

稿の花和芝ふを座の掃除と又て常と付さ

り表い形ハむま和芝まとゝふおを立てる作

こ式その俗をもて者ま季の出るも出めも

仏季を用るも芝表句より稿ひむる座を言

へ雑の者ま表の也良川を引て季とも

雅ともする去キを分ちまゝ孫伝授
する人もあるゝ前ぬ拾仙社変化自在を
宗とされい月むの亞不要の仮条あの仏
号毎篇歩まてそ作者の和論あれろ
も押ぶのてきさくする人い皆ひうこを考
奏ろしと人〳〵新彼去めゝ。——

海軒録三終